

1	1
学 図	小 国 5 1 7

教育部
資料法
文部省検定済教科書
人団
日本新教育研究会編修

国

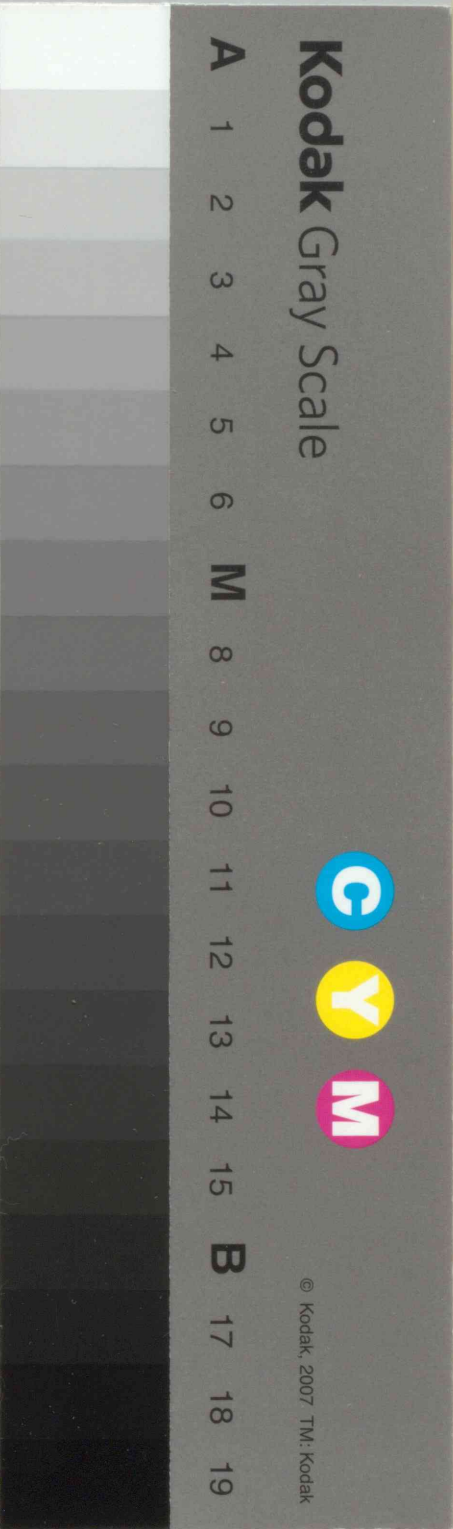
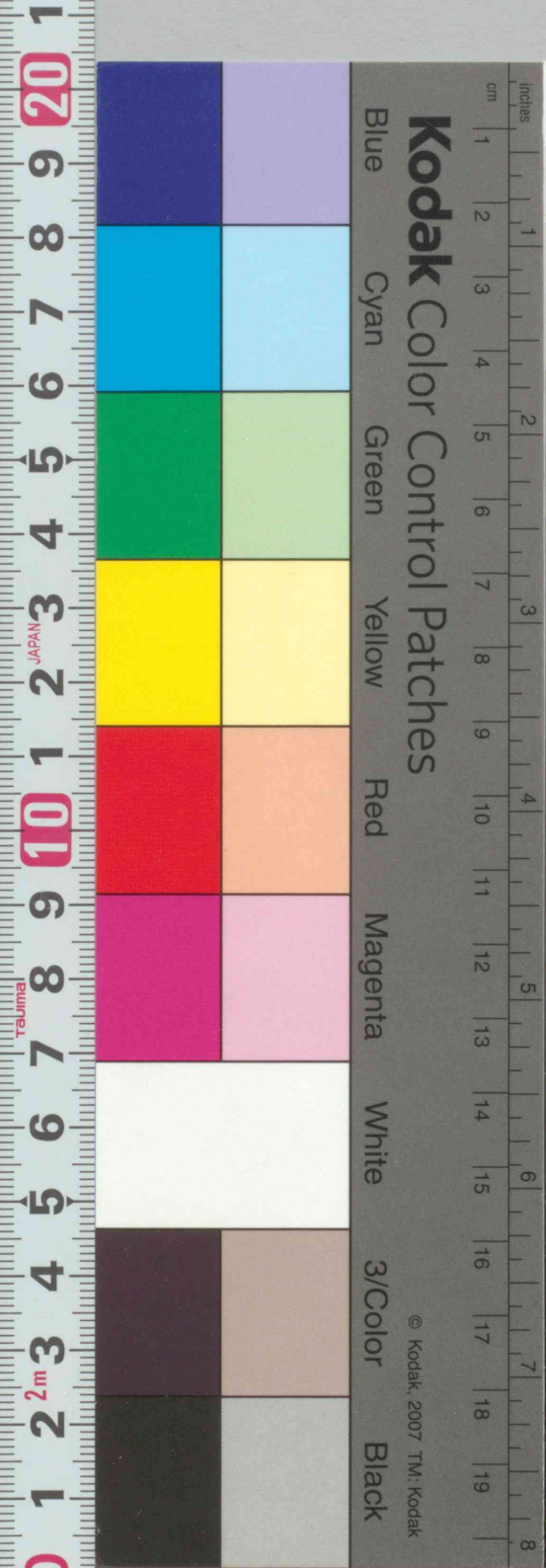
語

九



KC
G16

学校図書株式会社発行



60378

教科書文庫

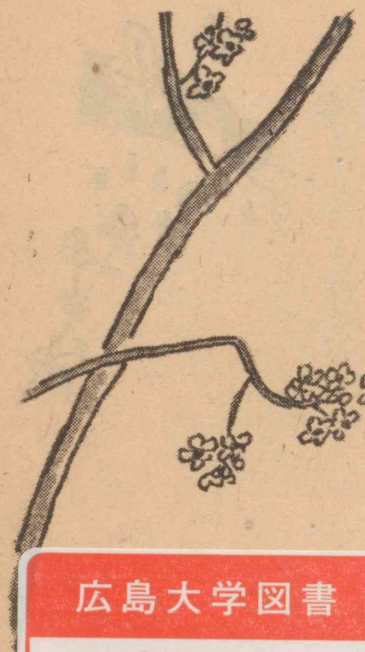
6
810
39-1950
01304 49671



教科書文庫
6
810
34-1950
0130449671

寄 贈

昭和二十五年 月 日
文部省検定済小学校国語科用



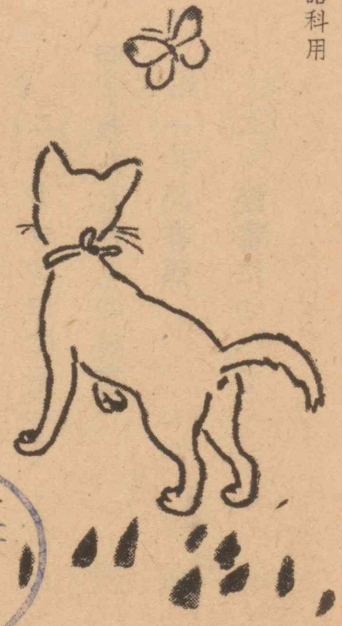
国
語
九

広島大学図書
0130449671

学校図書株式会社

第五学年用上巻

広島大学
教育学部図書



中央図書館

広島大学図書
0130449671



一 春

- (一) どこかで春が 4
 - (二) 学級日記 6
 - (三) カラスとわたし 14
- 二 美しい話
- (一) おかあさんの話 28
 - (二) 一頭のヤギ 36

もくろく

(三) 原始林の聖者

- 三 発電所をたずねて 50
 - (一) わたしたちの相談 60
 - (二) トロツコに乗って 65
- 四 わたしたちの読書
- (一) 図書係 76
 - (二) 読書について 80

五

(三) 本の話

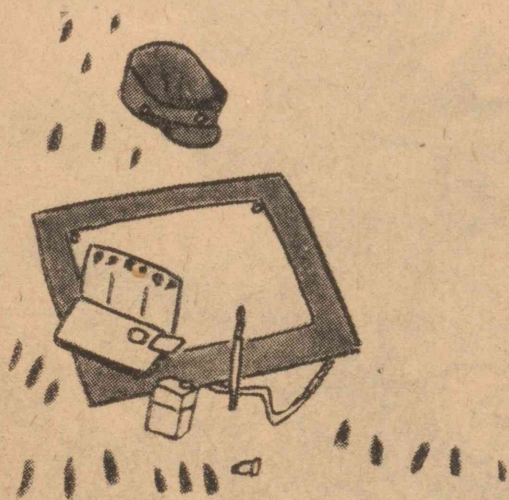
- (一) 波うちあがる 100
 - (二) 十五少年 102
 - (三) 大空をあおいで 125
 - (四) 星の歌 132
- 六 わたしたちの研究 (18)
- 外国からきたことは ——

学習の手引

漢字

新しく出たことば

- (1)
- (8)
- (9)

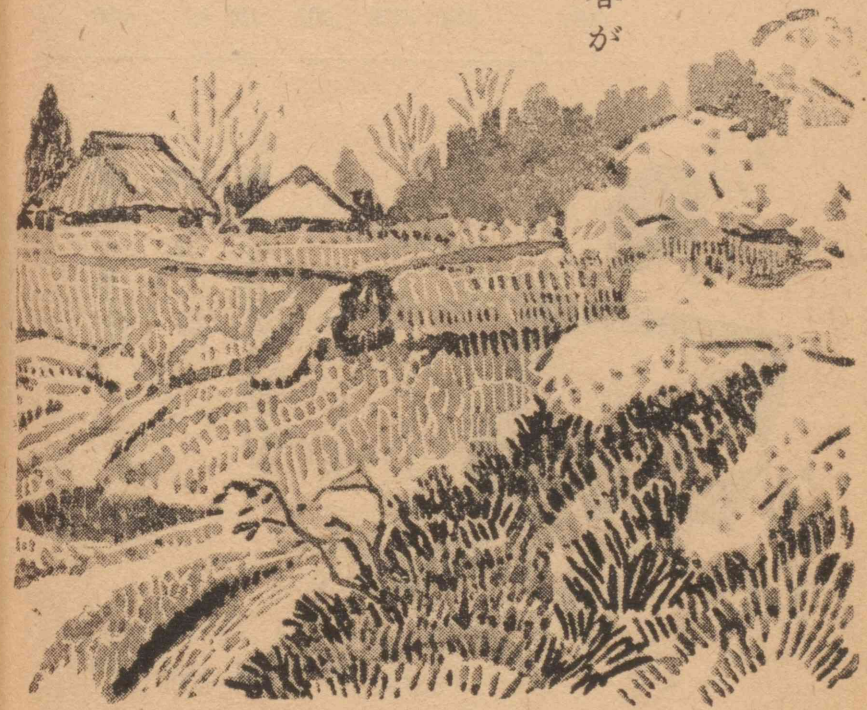


一 春

(一)

どこかで春が

どこかで春が
うまれてる
どこかで水が
ながれたす



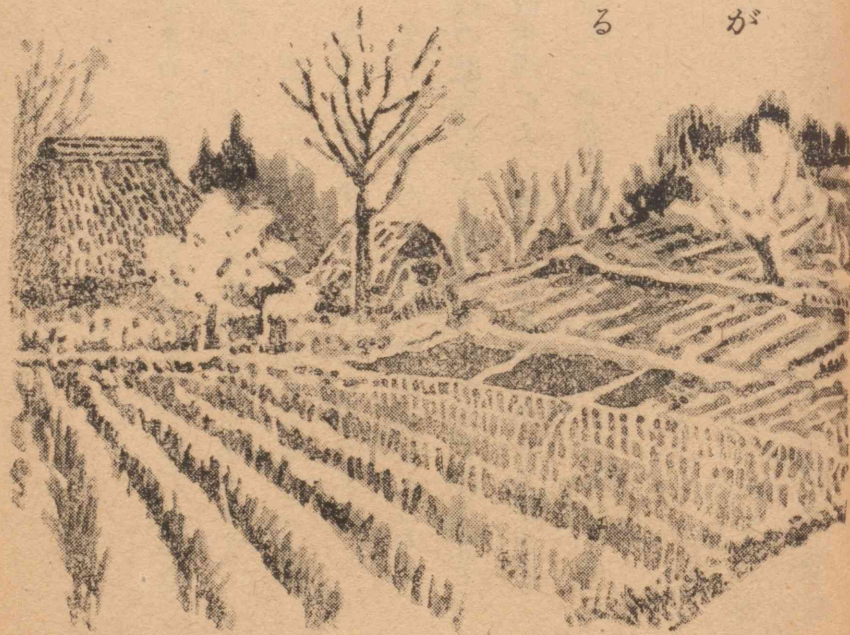
どこかでヒバリが
ないている
どこかで芽の出る
音がする

山の三月

東風 (こち) ふいて

どこかで春が

うまれてる



(二) 学級日記

学級日記をつけましょう

みなさんもやってみませんか。当番をきめて、かわるがわるにやってみてごらん下さい。日記をつけることは、はじめはおつくうで、いやになることもあり、でもそこがしんぼうです。書きなれると、だんだん、じぶんの思っていることが、楽に書けるし、日記を見ることが楽しくなって書かずにいられなくなります。

あなたの学校の毎日はこの日記によって、いちだんと楽しく明かるいところになるにちがいありません。あなたの学級の歴史が書き残されていくのであります。その歴史がつきつきに来る人たちの学級生活により参考になるのであります。(ここの四月一日は再びもどっては来ません。)学級日記といっしょに、めいめいの日記もつけるようになってください。

四月一日

きょうから五年生です。わたしたちの組のお友だちの弟や妹

で、一年生になる人が八人もいます。わたしの弟もわたしといっしょに学校にいけると言っていて、たいへん喜んでいました。弟はどんなに、きょうの日を待っていたことでしょう。

わたしは、急におねえさんになったような気がして来ました。

(まつの・とし子)

先生のお話のあとで、新しい班(はん)を作る相談がありました。六人ずつ組むのです。

「アイウエオの順からがいいね。」

「いや、せいの高さの順からの方がいいよ。」

「それじゃ、この前と同じになってしまふなあ。」

「好きな人たちだけで組んだ方がいいと思います。」

「そんなこと言っても、うまくまとまらないよ。」

「やっぱりアイウエオの順がいいと思います。」

名まえのはじめに「あ」のつく名まえの人、「い」のつく名まえの人というように分けてみました。

(あさの) (あおき) (あらい) (あきた)

さらにその中で、アイウエオの順にならべていきました。わ

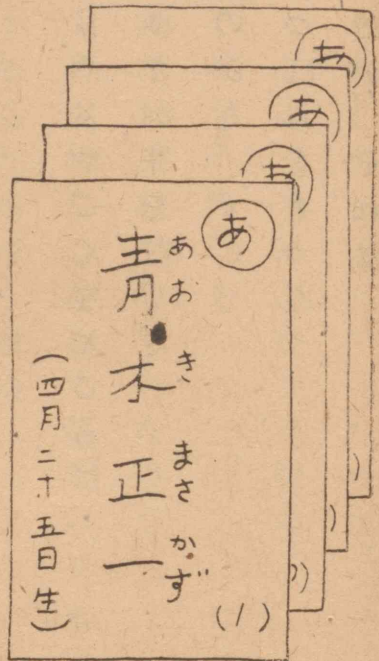
たしたちの班は、(まつだ) (まつの) (やまかわ) (やまだ)

(やまと) (よしだ) の六人です。 (やまと・よしお)

四月二日

きのう、調べたお友だちの名まえをカードにせい理しました。たいへんむずかしい漢字がいくつも出てきました。

先生に教育漢字表を貸していただいて調べてみました。教育漢字表に出ていない字がたくさんあります。



青木 正一
秋田 太郎×
浅野 一
荒井 良子×

同じ漢字でも、いろいろな読み方があるので、それも調べてみようと思いました。

正一 (まさかず) 良子 (よしこ)

一 (はじめ) 良子 (りょうこ)

このカードを生年月日の順にならべ直してみました。

四月五日 やまと・よしお

十一日

のむら・まさお

二十五日

あおき・まさかず

四月に生まれた人は三人です。その人たちのおたんじょう会
をやりたいと話しました。

(あきた・たろう)

四月三日

かべ新聞に、先生が詩をのせてくださいました。

おやおやこんなところに

ゆりが芽をだした。

のびた。

つぼみをもった。

だが、それは

わたしがわすれていたのだ。

じぶんでうめたゆりの根の

そのうめ場所を

わたしはわすれていたのだ。

うめたわたしがわすれていても

うめられたゆり根は

その場所にじつとしていて

いのちの芽をおもむろにそだてていた。

わたしがみすてても

自然はそれをみすてていなかた。

そのくせわたしは花のさくのを待っている。

(そうま・ぎよふうによる)

四月五日

一時間めに四月のカレンダーを作りました。

七日 自治会・学級文庫・かべ新聞の係をきめる。

十日 小鳥の日、ただしくんのおじさんに話を聞く。

十一日 身体けんさ

十三日 たんじょう会、この月に生まれた人には、じぶんの

小さい時の思い出とか、大きくなってからの希望などを話してもらうことにしました。

十五日 一年生をむかえる会を開く。

二十日 発電所の見学の相談をする。

(はしもと・みちこ)

四月十日

きょうは小鳥の日です。わたしたちもきょうの日のひょう語を作ってみました。

小鳥の目は しんじゆの目

青い鳥の国 ゆめの国

小鳥をまもろう 木をうえよう

小鳥はみんなのもの 国のもの

(いけだ・せつこ)

(三) カラスとわたし

ある年の青葉のころでした。かねて知りあいの小鳥屋さんが、わたしをたずねて来て、子どもの時からかいならしているカラスがあるのですが、さしあげましようか、と言います。「どんな程度にならしてあるのですか。」ときくと、家の中で遊ばせることもあるし、ときどき往来へも出すといふことで、先生ならば、もつとよくならすことができるでしょう、と言うのです。



そのころわたしは、たくさん的小鳥をかっていましたが、ただの一わもかごに入れず、どの小鳥もへやの中や庭で自由に遊んでいました。家が林に囲まれていたので、林へもかってに小鳥たちは遊びにいきます。が、わたしが小鳥たちにつけてある名まえをよべば、よばれた鳥たちは、喜んでわたしのかたや手へ飛んで来るのです。こういうありさまを見た人たちは、わたしが鳥の風切りばねを切つて、遠くへ飛べないようにしてあるのだらうとも言いました。むろん、そんなはずはありません。風切りばねを切ってしまったら遠くへも近くへも、とても飛ぶことはできないからです。

小鳥たちは庭や林を自由に飛んでいるのです。それにわたしがよびさえすれば、すぐ集まって来るのは、わ

たしによく慣れていているしょうこです。反対に、この光景を見てほんとうにおどろいた人たちは、わたしが何かまほうでも使っているかのように言いふらしました。そんなことでわたしと鳥たちとのこうした生活は、人々のひょうばんにもなっていないました。知りあいの小鳥屋さんが、わたしにカラスをくれようというのも、そういう生活をしているわたしにそのカラスがもらわれたら、カラスのためにさぞしあわせだろうと思つたかららしいのです。

むろん、わたしは喜んでそのカラスをもらうことにしました。数日過ぎた夕方小鳥屋さんは、カラスを小さなかごに入れ、それをふるしきに包んで持って来てくれました。ちょうど家中が、まるい食たくを囲んで夕飯をたべている時でしたが、かま

わず、そのへやへはいつてもらいました。

そこで小鳥屋さんはふるしきをほどいて、かごの口から手を入れたら、ぞんざいにくちばしをつかまえて、カラスを引き出しました。つやつやと黒光りのした、りっぱなカラスです。ふつうカラスといっているなかまには、二種類あつて、くちばしの太い方をハシブトガラスといい、くちばしの細い方をハシボソガラスといいます。

小鳥屋さんが持って来たのは、



ハシボソガラスのめすでした。カラスのおすとめすとは、よほど鳥を研究している人でないとわかりませんが、おすの方は、かたと額が角ばっており、めすの方はそのどちらも、なだらかなまるみがあるのです。おすとめすとは、つばさや、おの長さがほんの少しちがうということを書いてある本もありますが、それよりもかたと額で見分けるのが急所なのです。わたしは小鳥屋さんにカラスのおすとめすとの見分け方を話してから、

「生まれ何年になりますか。」

と、きくと

「三年目です。」

とのこととです。



間に、そのカラスは、のこのことわたしたちの食たくの方へ歩いて来ます。どうするだろうと見ていると、カラスはぶさぼうにも食たくの上へとびあがりました。たいへん、たいへん、と言って、家中の者がさげびたてました。小鳥屋さんもおどろいて、カラスを食たくからひきおろそうとします。

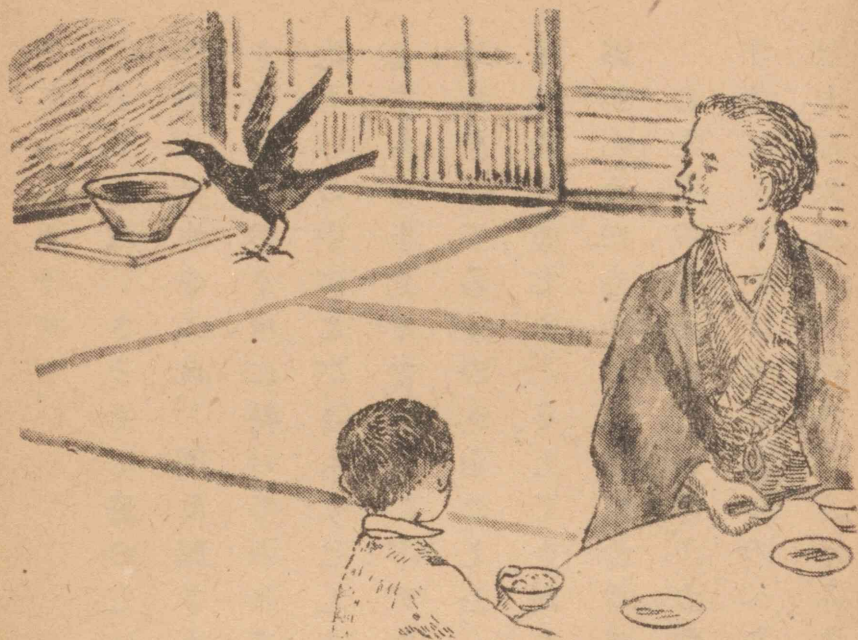
「うっちゃっておきなさい。カラスがどうするか見ていよう。」

そこで、一同がしかたなしにながめていると、カラスは食たくの上にあつたたまごやきを、おいしそうにたべ始めました。

茶飲みちやわんに番茶を入れてありましたが、それも飲みます。だれもかれもただあきれかえってカラスを見ているので、

「なかなかよくなれていきますね。」

と、小鳥屋さんに言うと、



へやのすみの小ばちの水を見つ
けると、そのはちの方へいきま
した。水が飲みたいのかと思っ
て見ていると、そうではなくて、
はちのそばで、からだをかがめ
て、はねをバタバタさせます。
カラスは水浴がしたいらしいの
です。「カラスの行水」というこ
とばがあります。これはカラ
スの行水のぞんざいなのをわら
ったものようです。が、カラ
スが水浴のすきなことをも意味

「とんでもないやつで、わたしの家でもときどきざしきで遊
ばせましたが、こんなことをしたことはありませんでした。」
「まあ、いいから、うちやつておきなさい。たかがカラスの
することです。したいようにさせておくのがいい。そのうち
わたしによくなれたら、わたしのいうこともよくきくようにな
ります。こんなわんぱくはさせないように教えこみます。
まったくこのカラスはかわいいね。」
わたしがこんなことを言っていて、いっこうに平気なので、
ほかの人たちもしかたなくカラスのすることを見ていました。
これが、このカラスの、わたしの家へ来ての第一日でした。
第二日目の朝ご飯の時も、カラスはまたわたしの食たくの方
へやって来ました。まんざらこの家もきらいではないようです。

しているようです。

わたしは、さっそく庭のしばふに大だらいをおいて、それに半分ほど水を入れ、別に顔をあらう金だらいに水を入れ、それをカラスのそばに持って行って見せると、はたしてカラスは金だらいの中にとびこもうとします。そこでわたしは、カラスに金だらいを見せながら、ドアを開けてろうかへ出しました。カラスも続いてろうかへ出しました。こんどは同じようにして庭へさそい出しました。そして金だらいを見せ続けながら、しばふにおいた大だらいの所までカラスをさそっていきましました。

わたしの考えたとおり、カラスは大だらいの水を見ました。すると、すぐに大だらいのへりへとびあがって、二・三度くちばしに大だらいの水をふくみました。水の温度を調べているの

です。やがて、すんと大だらいの中へとびこむと、バチャバチャと水浴を始めました。

この水浴が終ると、わたしはカラスの目の前へ、ポケットに用意していたビスケットを見せました。クアアとひくく鳴いて、カラスはそれをくわえようとしています。わたしはビスケットを見せながら、あとずさりをしました。カラスはそれがほしくてついて来ます。こうして室内からさそい出した時とあべこべにビスケットでわたしはカラスを室内へみちびき入れました。

わたしのしんしつは二階でした。朝になると、ろうかの天井より近くにわたしてあるとまり木にねているカラスは、トコントコンと階だんを一だん一だんのぼって来て、わたしのへやの外で、ドアの開くのを待っているのです。だれかドアを開けて

やると、まだねているわたしのまくらもとで、わたしの起きるのをおとなしく待っています。それもわたしがねがえりをうったらもうだめです。カラスはわたしが目を覚ましたと思つて、しきりにカアカアと鳴きたてます。

「早く起きろ。」

と、言っているのです。こうなつては、たぬきねいりをしてカラスはいうことをききません。まくらをくわえてひっぱったり、わたしの耳のあなへくちばしを近づけて、カアカア鳴いたりするので、とてもうるさくてねてはいられません。が、目がさめてもねがえりをうたずにじつと目をつぶっているとき、カラスはわたしがまだねむっているものとばかり思つて、おとなしく待っています。

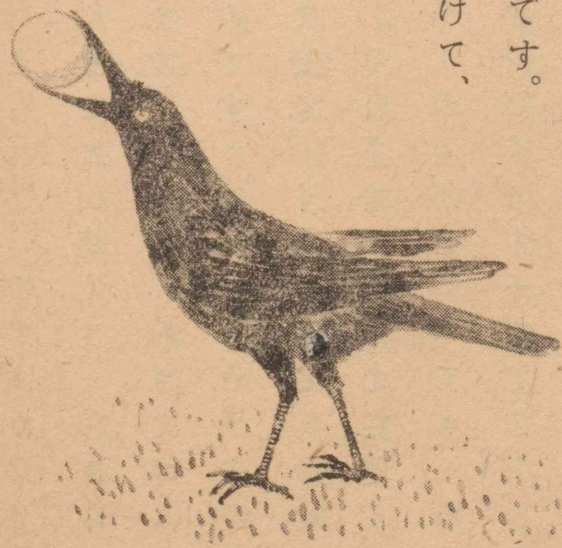
そのようすをかけぶどんのえりのすきから細く目をあけて見ているとき、とてもかわいくなつてきて、起きてやらすにはいられなくなりす。

さて起きると、わたしもカラスも庭へ出ます。そしてキヤツチ・ボールや草むしりが始まるのです。

ゴムまりにはりて小さいあなをあけて、中の空気を少しぬきます。それを、

カラスの方へ遠くから投げてやると、カラスはそれをじょうずにくちばしでうけ止めるのです。

ゴムまりがかたくはりきつていると、せつかくうけ止めても、



くちばしではじいてしまつて、くわえられないので、カラスは
いらだちます。そしてなんでもこんなことが続くと、あきらめ
てキヤッチ・ボールをしなくなりません。それで、わざとゴムま
りをやわらかくしてうけとらせるのです。けれどもカラスの方
からわたしへまりを投げてはくれません。くわえると、かんだ
んにしばふの上へほうり出します。それを拾つて、また遠くか
ら投げてやるのですから、キヤッチ・ボールといつても、わた
しは、ピッチャー専門、カラスはキヤッチャー一方ですが、カ
ラスはこの遊びがとてもすきなのです。

つぎにはしばふの草むしりのおてつだいをさせるのです。し
ばふの外がわに、いろんな草花が植えてあつて、赤や白やむら
さきや黄の花がさくのを、カラスがくちばしでむしります。ど

うかして、そういついたずらをさせないようにと考えた末に、
わたしはしばふの中にまじつてゐる雑草をおおげさな身ぶりで
引きぬいて見せました。すると人まねのすきなカラスは、すぐ
それをまねましたが、すぽんすぽんと雑草がよくぬけるので、
やがてその方が花をちぎるよりおもしろくなつたらしく、しき
りに雑草ぬきをやります。

なにしろするどいくちばしで根もとをしつかりくわえて、カ
マカセに引きぬくので、とてもよく根ごとぬけます。それにカ
ラスの雑草ぬきは、とても早わざなのです。

毎朝庭へ出ては、わたしがこれを始めるとカラスもわたしに
続いて、せつせと草むしりです。これは家中でも、いちばんひ
ようばんがよかつたようです。

(なかにし・ごとうによる)

二 美しい話

(一) おかあさんの話

「それはね。おかあさんがまだ女学校にいつていたころのことなの。おかあさんは、学校の帰りにわざとまわり道をして、ゆしまの天神下に出て、それから天神様の境内を通りぬけて、ほんごうのおうちに帰ってくるのがよくあったの。そんな時には、きまつて、あの天神様のうらの石だんを登って境内に出たものでした。あなたは知っているかどうか、あの天神様のうらには、今でも古い石だんが残っているはずよ。あすこを通ると、

昼間でも、なんだか空気がひやりとするような、さびしい石だんだったけれど、今はどうですか……。

ある日おかあさんが、その石だんを登りかけた時、見るとひとりのおばあさんが、もめんのふろしき包みをかた手にさげて、おかあさんより五・六だん先を登っていくところでした。そうね、年はもう七十五をこしていたでしょうが、今でも覚えていられるけれど、しらがのかみを切り下げにして細いしゆすのおびをぺちゃんこにしめ、着物のすそをはしょってこうもりがさをつえにやつとこさと石だんを登っていくのよ。ふろしき包みの中は何かわからなかったけど、小さいわりにずいぶん重そうなの。歯のついたげたをばいているもんだから石だんをふみしめるたびに、それがキリッ、キリッときしんで、見ていても、そりゃ

あ足もとがあぶないんです。で、二・三だん登っては休み、二・三だん登っては休み、休むたんびにこしをのぼして、それからまた、えっちら、おっちらと登っていくのね。おかあさんはなんだか見ていられないような気がしてきました。

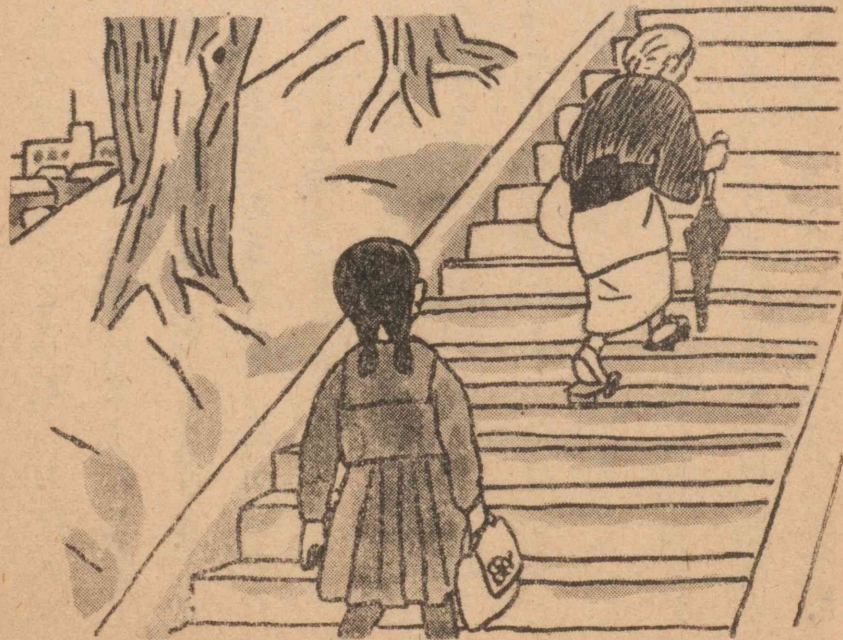
これは、あの荷物を持ってあげなけりやいけない。おかあさんはそう考えたの。とんとんとかけ登って、おかあさんに追いつくのはどうさもないし、その荷物を持ったうえに、おばあさんの手を引いてあげるのだから、おかあさんにはたいしたほねおりじゃないんですもの。それで、おばあさんがちゅうとで止まって、やれやれとこしをのぼしている時、おかあさんは、そのそばに走りようと思ったのよ。ところが、そのとたんに、おばあさんも歩きだしたの。せなかをまるくして、ほかのこと

は何も考えないようなようすで歩きだされてみると、おかあさんも話しかけるきっかけがないような気がして、そのまま走りよれなくなってしまう、だまっておばあさんのあとから登って、いきました。

こんどおばあさんが休んだらその時、そばにいつて、

『おばあさん、持ってあげましよう。』

と言いだそう。そう考えて、お





おかあさんも、おばあさんに追いついて、ふたりは同時に最後の石だんをふんで天神様の境内に立ったんです。おかあさんがすぐ後で、こんなことを考えて気をもんだことなんか、ゆめにも知らないで、おばあさんは、石だんを登りきるとふろしき包みをそばのこしかけ石におろし、しばらくこしかけることをわすれたように、こうもりがさをつえにして、目の下の町をながめ

かあさんはあとからついていったんです。ところが、おばあさんが立ち止まった時になると、何かまじりの悪いような気がしてきて、すぐにとんとんとかけ登っていけないの。どうしようかな、と考えているうちに、また、おばあさんは、見向きもしないで石だんを登り始めてしまいました。

この次に止まった時——。おかあさんは、そう考えて、またおばあさんのあとから、石だんを登っていきました。だけど、その次の時も、ちよつとためらっているひまにきっかけをうしなってしまうって、まただめでした。

そんなことを二・三回くり返しているうちに、何しろ、そうたくさんもない石だんでしよう。どうどうおばあさんは石だんを登りきってしまったの。ためらい、ためらい、ついていった

ながら、かたて息をしておきました。そうして、おかあさんの方を、見たけれど、別におもしろくもないという顔付で、また向こうを向いてしまったの。

それなのに、おかしいわね、おかあさんの方では、その顔を今でもちゃんとおぼえているんですよ。

話っているのは、ただこれだけなの。でも、おかあさんはずっとあとになってからも、この時のことをときどき思い出します。そう、いろいろな時に、いろいろな気持で思い出しますの。

おかあさんは、そう言っただけのことばをききました。そして、あみもの手だけは休めずにせつせと運びながら、何か遠いことを思いうかべているようすでしたが、やがて、また静かに話し始めました。

「おかあさんのたいぎそうなようすを見かねて、かわりに荷物を持ってあげようと思ひながら、心の中でそう思っただけで、とうとう果たさないうちでしまった。まあ、これだけの話ですけど、このことは、みように深くおかあさんの心に残ったんです。その時も、おかあさんに別れて、ひとりでおうちへ帰るとちゆう、歩きながらいろいろそのことを考えました。なぜ思ひ立った時すぐに出さなかつたんだらう。なぜ心に思つたとおりにあげなかつたんだらうって、そう思うと、じぶんがいへん悪いことをしてしまつたやうな気がしてくるのね。」

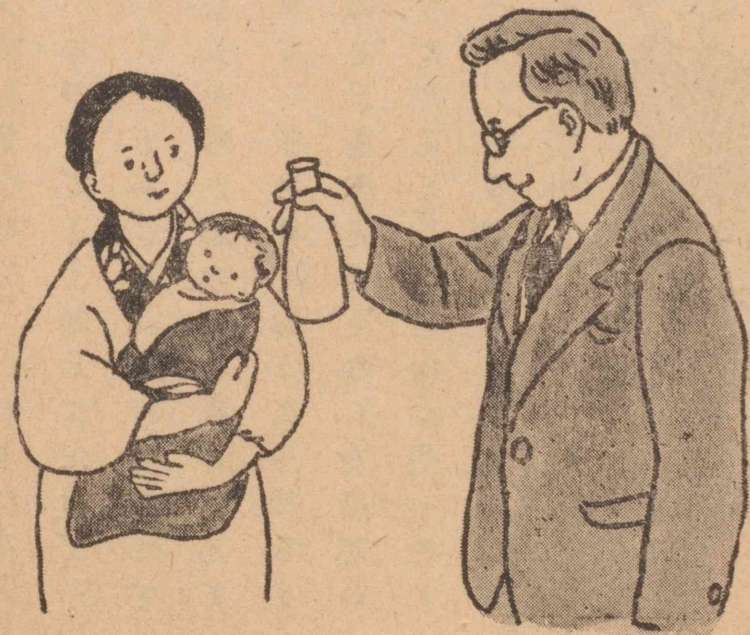


(二) 一頭のヤギ

ニコルソンさんは、日本で学校の先生をしていました。

動物がたいへんすきでヤギをかっていました。近くの人が病気にかかったり、おちちの足りないあかちゃんがあったりしますと、ニコルソンさんはさっそくちちをしぼって

「どうぞこのちちを飲ませてください。」



と言って、持って行ってあげるのです。ですから、近所の人たちはニコルソンさんのことを、「ヤギおじさん」ともよんでいました。

ところが、昭和十六年の秋に太平洋戦争が始まりました。ニコルソンさんは、すきな日本にいたことができなくなりました。それです。しかたなしに、三十年も住みなれた日本とたくさんの日本のお友だちに別れて、アメリカへ帰っていきました。

日本を引きあげたニコルソンさんは、カリフォルニア州のコロラド川のほとりで果じゆ園を経営して、メロンや夏ミカンを作ることになりました。また、日本での生活を思い出して、こ

長かった戦争もやっと終わりました。久しい間、世界の人々が、心から望んでいた平和が、再びおとずれて来ました。ところが、勝った国も負けた国も、物資が少なくなつてこまりましたが、とりわけ負けた国は損失も大きく、国民はたいへん苦しみました。そこで、そういう国の人を一日も早く助けようという運動が起こり、アメリカにその本部ができました。これをララといいます。国民から衣類や食物を集めて、気の毒な外国の人々に送り、戦争ですさんだ人々の心をなぐさめてやろうというのです。そして、ニコルソンさんもララの委員に選ばれました。

日本へは、学校給食のざいりょうを送ろうとか、衣類を送ろうとか、いろいろの相談が始まりました。

ニコルソンさんは、「そうだ。日本にいる時、わたしはヤギおじさんといわれたのだ。ひとつ、日本の子どもたちにヤギを送つてあげよう。おいしいおちちを飲んで、子どもたちはじょうぶに育つだろう。」と考えました。そこで、ヤギを買うお金を集めるために、さつそく方々を回つて歩くことにしました。

アメリカのお金持から、ヤギを買うお金を寄付してもらつたほうがたやすいことだったかもしれません。日本の少年少女へ送るには、同じくらいの年ごろの子どもから集めたお金で買ってやった方が、どれほどよいものであり、また、おたがいにまごころが通ずることだろう。そう思つて、ニコルソンさんは、アメリカ各地をまわつて、

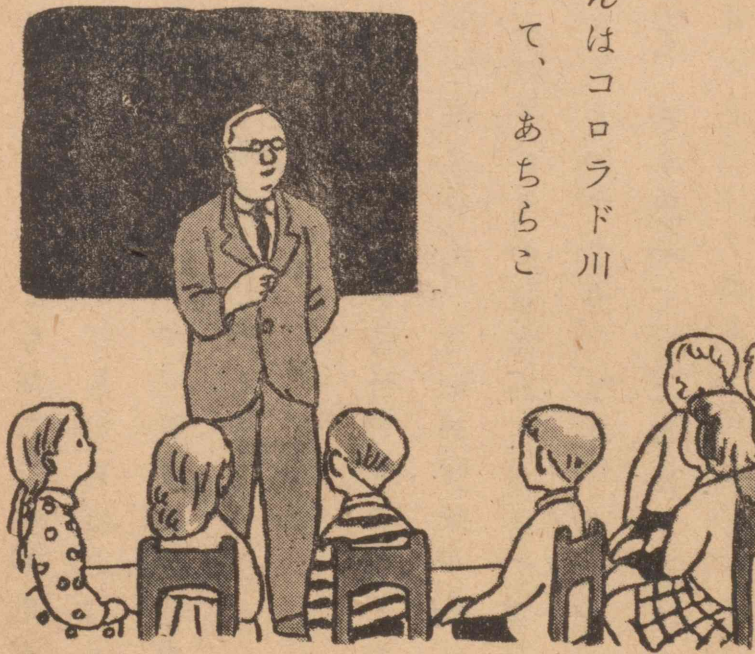
「日本へヤギを送りましょう。子どもたちのおこづかいの中か

ら、ほんの少しでも出しあつて、ヤギを送つてあげましょう。」と、説いて歩きました。

その日も、ニ科尔ソンさんはコロラド川をずっと山おくへさかのぼつて、あちらこちららの学校をたずねました。

「日本の子どもたちへヤギを送りましょう。」

ニ科尔ソンさんは熱心に説いてまわりました。そしてまた次の村へと急ぎました。ところがぐもりかけた



空が、いちめんまっ黒な雲になり、夕日はしずんでしまったのにめざすイーストン村まではまだ遠いのです。

「どこか、この辺でひとばんとめてくれる所はないかしら。」

そう思つて、一けんのみすぼらしいのうかをたずねました。

その家には、おかあさんと三人の子どもがいました。いちばん上の子はハリーといつて十二才、次がジョンで九才、いちばん下のかわいい女の子はメリーといつて五才でした。おとうさんは、こんどの戦争に太平洋のある島で戦死してしまい、今では、おかあさんの手ひとつで果じゆ園を経営して、まずしいくらしをしているのでした。

それを聞いて、ニ科尔ソンさんはすっかり同情してしまいました。かばんの中からいろいろなおかしを出して、三人の子ど

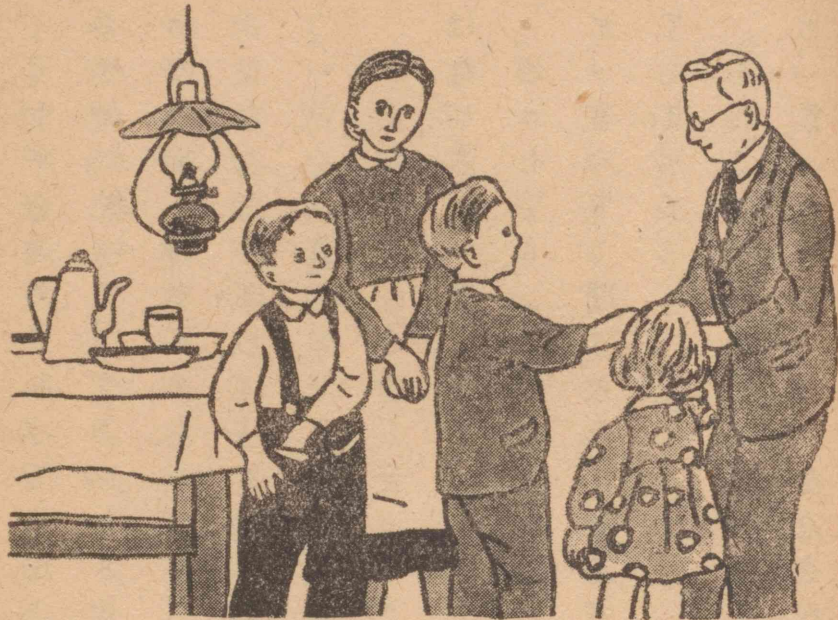
もたちに分けてあげました。すると、いちばん上のハリーが
「おじさんはイーストンへいくの。」
と、たずねました。

「うん、ちよつと、あそこの学校に用事があつてね。」

「では、おじさんは先生ですか。」

「いや、学校の先生じゃないが、実はおじさんはね、長い間日本に住んでいたのだが、こんど……。」と、日本のお友だちへ送る物資の一つとして、ヤギを買うお金をアメリカの子どもたちから集めていること、そのためにイーストンの学校へ寄付のお願いにいくとちゆうであることなどを話しました。

三人の子どもたちは、じつとニコルソンさんの顔を見上げて聞いていましたが、やがてハリーは洋服の内ポケットから何か



くちやくちやになつた小さな紙包みを取り出しました。その中には、一ドルの銀貨がはいっていたのです。

「おじさん、このお金、たんじよう日のプレゼントにおかあさんからいただいたんです。本でも買おうと思つて、たいせつにしまつておいたのですけど、どうかヤギを買うお金に使ってください。そして、日本のお友だちに一頭でも多

くヤギを送ってあげてください。」

それに続いて、ジョンもメリーも、だいじにしておいた一ドルの銀貨を持って来たのです。ニコルソンさんの目からは、大きななみだがぼろぼろとおを伝わって流れました。

「いいんだよ。おじさんは、もうたくさんのお金が集まってるんだから、そのお金は、さ、しまっておきなさい。」

けれども、ハリーたちは、

「どうしても、このお金を使ってください。」

と、言つて、聞き入れませんでした。ニコルソンさんはこまつてしまつて、

「それでは、この三ドルはありがたくいただくことにしよう。」

と、言いながら、いったんそれを受け取つて、こんどは自分の

さいふから二ドルのお金を出しました。

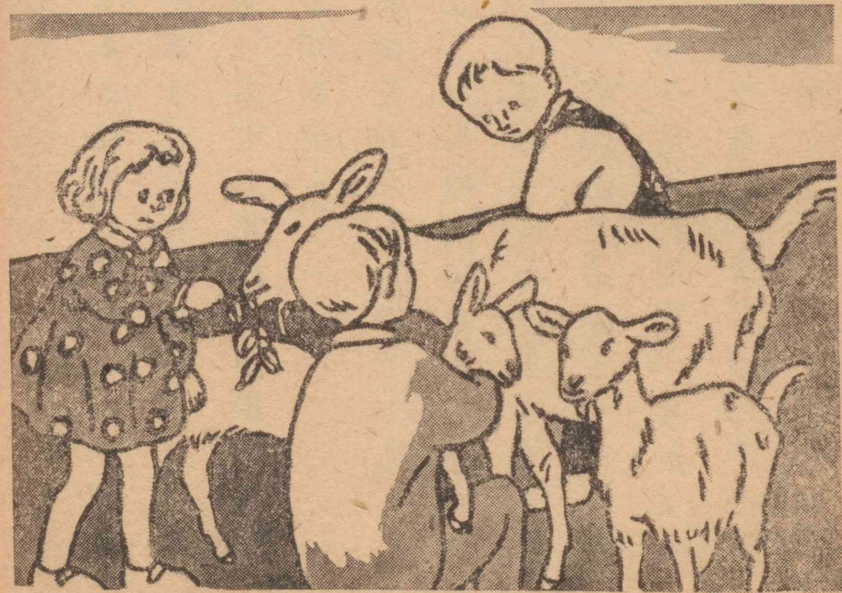
「さあ、これで五ドルあるね。五ドルあれば、子どものヤギが一頭買えるんだよ。だから、おかあさんに買っていただいで、大きく育ててごらん。そうしたら、おじさんは、ほかのヤギといっしょにして日本へ送つてあげるから。」

と言つて、ハリーたちに五ドルのお金をわたしたのでした。

ニコルソンさんは、その夜はハリーたちの家にとめてもらつて、あくる朝早くイーストン村へたつていきました。ハリーたちのおかあさんは、そのすぐあとで、町へ出て、小さなめすの子ヤギを一頭買って来ました。三人の子どもたちは、なかよしの家族がひとりふえたので、たいへんな喜びです。ジョンとメリーは、毎日青々とのびた草をかつて来て、たべさせました。

夏が去り、秋も過ぎて、やがて新しい春をむかえました。ある日のこと、ニコルソンさんの所へ一通の手紙がとどきました。

おじさんがわたしの家へとまられてから、もう一年以上にもなります。おじさんに買っていただいた一頭の子ヤギも、今ではりっぱなおかあさんヤギになって、子どもを四頭も産みました。ヤギのせわは、ぼくとジョンと



メリーでしています。ぼくは毎日ヤギのちちを飲んでいます。おかげで、悪かった足がとてもじょうぶになって、今ではひとりです。とりで歩けるようになりました。

それから新聞で見ましたが、方々の学校から集めたお金で買ったヤギが、もう二回も日本へ送られたということですね。この次送る時には、ぜひぼくたちのヤギを連れて行ってください。そして、日本のお友だちにヤギのちちを少しでも多く飲ませてあげてください。お願いします。

ハリーより

ニコルソン様

と、書いてあるのでした。ニコルソンさんは、いく度もいく度もこの手紙を読んでいるうちに、何か熱いものを、むねいっば

いに感じました。

ニコルソンさんは、さつそく自動車でハリーの家へいきました。ニコルソンさんをむかえたハリーきょうだいとおかあさんの喜びはどんなだったでしょう。ハリーたちは、じぶんたちがいっしょうけんめいに育てたヤギが、はるばる海をわたって日本へいくのですから、うれしくてしかたがありません。そこで、「日本のお友だちのみなさん。どうかぼくに代わってこのヤギをりっぱに育ててください。アメリカのぼくたちと、日本のみなさんと、このヤギをおして、ほんとうになかよしになりましょう。」

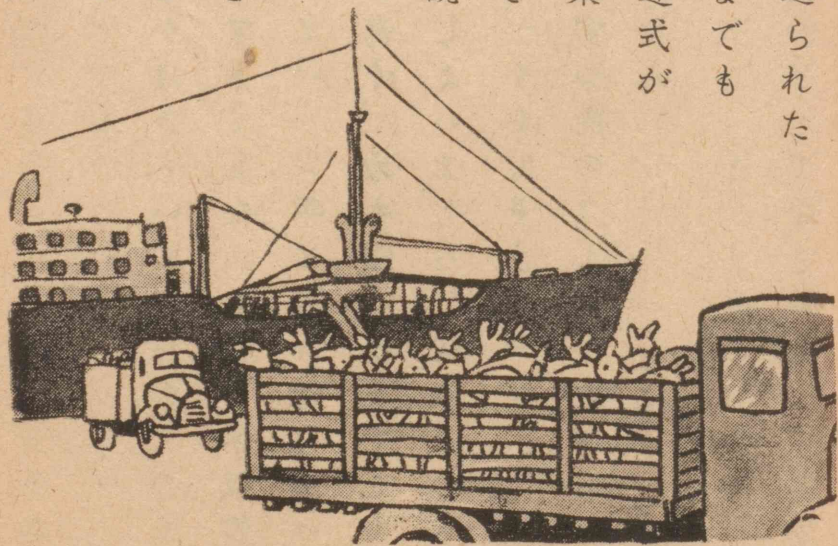
という手紙をそえて、ヤギを日本へ送ることにしました。

昭和二十四年の一月十六日、二千五百頭のヤギがよこはまに

着きました。その中にハリーから送られた

ヤギがはいっていたことは、言うまでもありません。にぎやかなヤギの伝達式が行われました。その時、同じ船に乗ってヤギを送って来たニコルソンさんは、ハリーの手紙を、声高々と読みあげたのでした。

これらのヤギは日本中のこ児院へ分けられました。今ごろは、両親を失った子どもたちのよい遊び相手となつて、かわいがられているでしょう。





(三) 原始林の聖者

をしました。相手はかれよりせいが高く、力も強いはずでしたが、アルベルトにおさえつけられてしまいました。組みふせられたゲオルグは苦しい息をしながら、くやしそうに、

「ぼくだってきみのように毎週二度ずつ肉のスープが食べられりゃ、きみぐらい強くなるんだが。」

と、言いました。

それを聞くと、アルベルトは、はつとして手を放し、すっかり考えこんで、とぼとぼと家に帰りました。ゲオルグの一言はアルベルトがふだんからうすうす感じていたことを、いじ悪いほどはつきりと言いきったのでした。

村の子どもたちは、ぼくしの子どもと言えば、ぼっちゃんあつかいにしています。その区別をされることはかれにとってどんなに苦しかったことでしょう。

このことがあってから、アルベルトは肉のスープを食べなくなりました。

「おかあさんが作ってくださるものをたべないなんて、そんなわがままを言ってはいけない。」

と、おとうさんはきびしくかれをしかりました。

しかしかれがさじでスープをすくって飲もうとすると、その

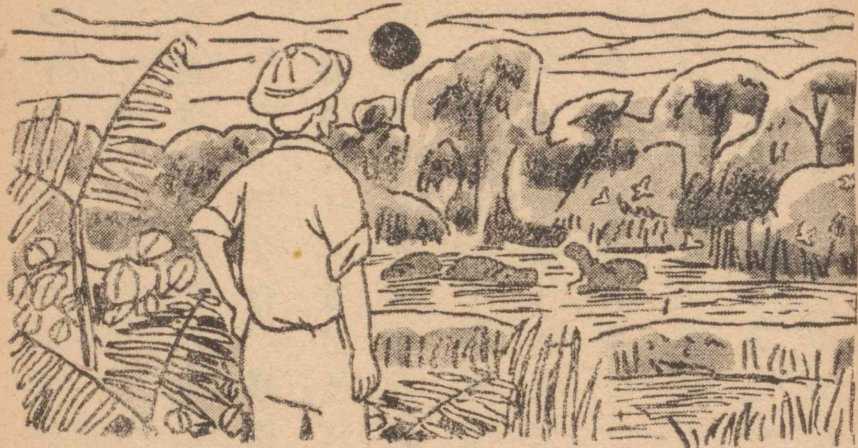
湯気の中から、あのゲオルグの声が聞こえて来るように思われ
てなりません。そうすると、父のきびしい顔と母の心配
そうな顔に心をいためながらも、もうスープはのどを通りませ
ん。アルベルトは心の中でもだえながらも、その気もちを説明
することができませんでした。

それから間もなく、父がじぶんの古いマントをアルベルトの
ために仕立てなおさせましたが、アルベルトはどうしても着よ
うとしません。かれは、村の子どもがひとりだってマントを着
ていないのに、じぶんだけ着るのは、いやだったのですが、父
はそうはとらないで、お古だからいやがるのだと思つて、どう
とうおこつてしまいました。しかしかれは、どんなに寒くても、
マントを着ませんでした。

また母が町にアルベルトを連れていった時、りっぱなぼうし
屋で新しいかたの上等なぼうしを買つてやろうとしました。す
ると、かれはせっかく売子の出して来るかっこうのいいぼうし
をみないやだと言つて、村の子どもたちのかぶるようなそまつ
な物を、わざわざ買いました。母も子どもの強情なのにすつか
り手こずつてしまいました。アルベルトはじぶんだけおいしい
ものをたべる気になれなかつたように、じぶんだけいい身なり
をする気にはどうしてもなれなかつたのです。

村の子どもに対してばかりでなく、かれはまた、動物に対し
ても深い同情心をいだいていました。

ある時、友だちとゴムのパチンコを作りました。そしてさそ
われるままに鳥をとりに出かけました。かれは内心、非常にお



ち、天にもとどくような立ちがれの大木にとまります。その木の根は、重なりあって水の中からつき出ています。ほとんど水と陸との境がわからないほどです。どんよりとした水面に顔を出すカバの群の上をかすめて飛ぶ小鳥。近くの木の間からサルが顔をのぞかせています。大むかしそのままのアフリカのおく地の夕ぐれです。

水ぎわに立ってこの美しい光景を静かにながめている人こそ成人したかれ、アルベルト・シュワイツェルです。かれは

それていましたが、からかわれるのがいやなので口に出しては言いませんでした。ふたりはかれ木にとまって無心にさえずつている小鳥をねらいました。友だちにしいられてかれもねらわないわけにはいかなかったのです。だが、かれは決して小鳥に当てまいと決心しました。ちょうどその時、日の光と小鳥の歌の中にとけいるように教会のかねがなり始めました。少年の心には、このかねが天からの声としてひびいたのであります。かれはパチンコを投げ出し、小鳥たちをおどろかして飛び立たせ、自分も家へにげ帰りました。

● 緑したたる原始林、しずんでゆく大きなまっかな夕日。

● 大きなワシが緑の中から、あたりの静けさをやぶって飛び立

ヨーロッパにおいて、すでに学者、音楽家として名声をあげていたのですが、すべてをなげうって、めぐまれない土人のために医者としてほうししようとしてアフリカへやって来たのでした。

アフリカでは、場所によって気候になれない人には、たいへん住みにくいようなところもあります。日光の直しやが、はげしいので日しや病にかかる人もあります。ボートがひっくりがえったために、上になった船底に馬乗りになった時、ほうしをなくしてしまったことに気がついて、あわててシャツをかぶった時は、もうおそく、たちまち重い日しや病にかかってしまった人もありました。

そんなにおそろしいアフリカに、なぜわざわざ出かけていかなければならなかったのでしょうか。

かれが学生だった二十才のころのことです。じぶんの小さい時の幸福をしみじみと回想することがたびたびありました。そしてこの幸福を当然のものとして受けていいのだろうかどうたがい始めました。じぶんのまわりを見る時、あまりにも不幸な人たちの多いことに気がつき、心をいため、なんとかしてこういう人たちにほうししなければならぬと深く考えるようになったのであります。かれはいろいろ考えた末、

「わたしは、三十才まで勉強しよう。それから、人類へのちよくせつのほうしにこの身をささげよう。」と決心しました。

かれは、学校をそつぎようして母校の先生となり、生徒たちから尊敬されるようになりました。

このころ、かれはアフリカの人たちの気の毒な生活を聞いて、医者としてアフリカへゆき、この人たちを救おうと思いました。全く近代の文化のめぐみからとり残された人たち、病気になれば、ただ死を待つばかりの人たちのことを考えた時、かれはもうじつとしていられなくなりました。そして医学をおさめるために再び学生になりました。かれがいよいよアフリカへわたる時になっても、まわりの人たちはいろいろのことを言って止めようとしましたが、かれの決心をくつがえすことはできませんでした。とう着後まだなん日もたたないのに、病人がたくさんやって来ました。二・三百キロメートルもはなれている所から、カヌーをあやつって集まって来ました。せきり、マラリヤをはじめ悪性の病気とのほげしい戦いが始まりました。夫人も一か

んごふとして、ほうたいをまき、薬を調合し、また手術の助手としてけんめいに働きました。病室がないので戸外でしん察をするのです。雨がふって来て、あわてて道具をかたづけました。もありました。やがて最初にできた病室はニワトリ小屋を改造したごくそまつなものでありました。

その後、三十数年間、シュワイツェルの手によって救われた人々はどんなに数多いことでしょう。かれのとうとい人類愛の精神はアフリカの暗黒の中に一点の光明をともしたのであります。その光明はしだいかかやきをまし、ついには全世界を照らすにいたりました。

平和と人道の戦士、アルベルト・シュワイツェルの名をわたしたちは、永久にわすれることはできないでしょう。

三 発電所をたずねて

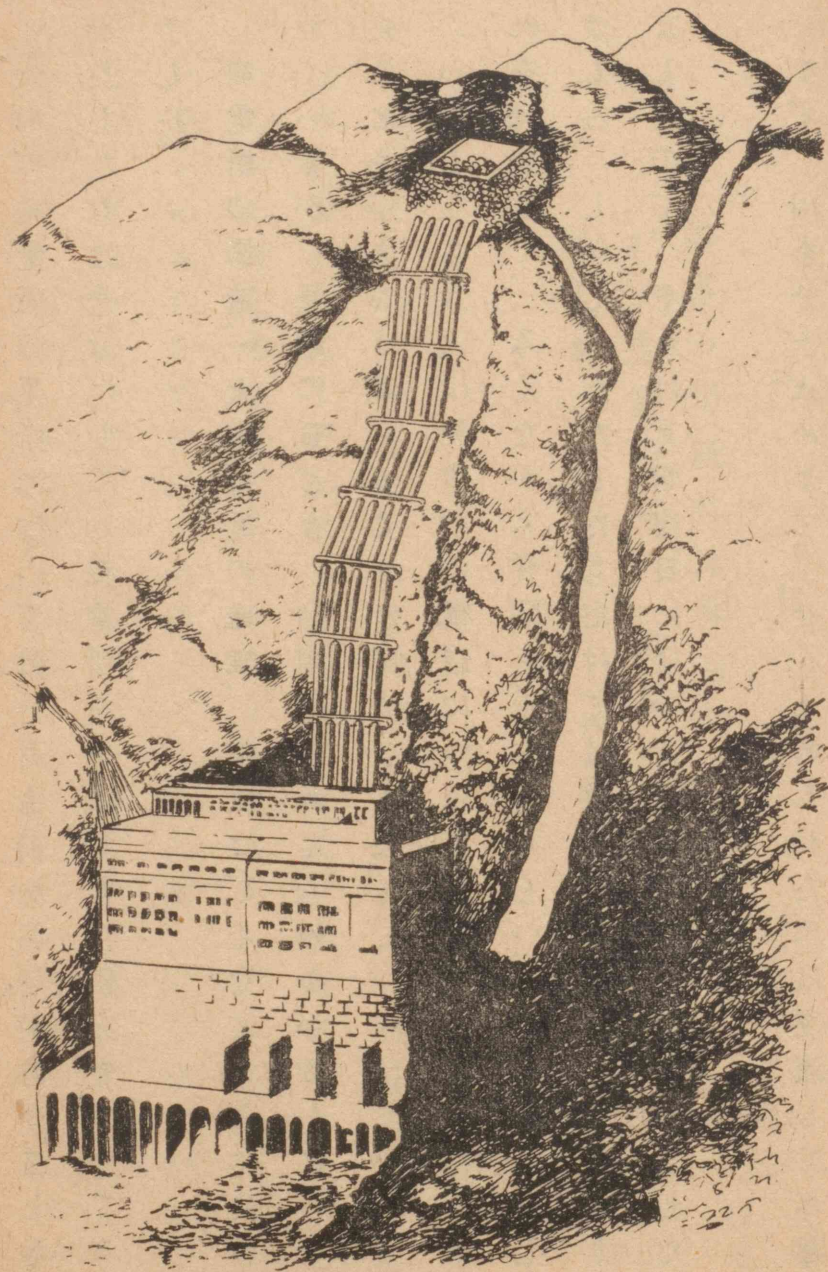
遠足や見学をじゅうぶんに利用して、いろいろな勉強をする計画をたててください。それには前の勉強がありませんと、せつかくの遠足や見学もほんやりと過ぎてしまいます。

おたがいに話し合つて、どんなことを調べるかきめましょう。

それを協力してまとめて発表会をいたしましょう。

当日は小さなノートを持って行って、見たこと、聞いたこと、思ったことを文字で写生してきてください。もどってきたら、さらにじぶんたちの研究をせい理し、報告文を残したいものです。もちろんお世話になった方にはお礼の手紙をわすれてはなりません。

(一) わたしたちの相談



大川の発電所の見学については一月も前から話がありました。わたしたちは手分けして、発電所を中心とした研究をやってみました。

発電所の構造、大川付近の地理、電気はどんなところに使われているか、見学の日どり、ひ用はどれくらいかかるかといったことをいちおう調べることができました。

わたしたち六人は発電所の構造について調べてみました。それを発表して、みんなから質問を出してもらい、話し合いをしました。しかし、わたしたちだけでは解決できないこともありましたので、それは見学当日にはつきりすることに決めました。

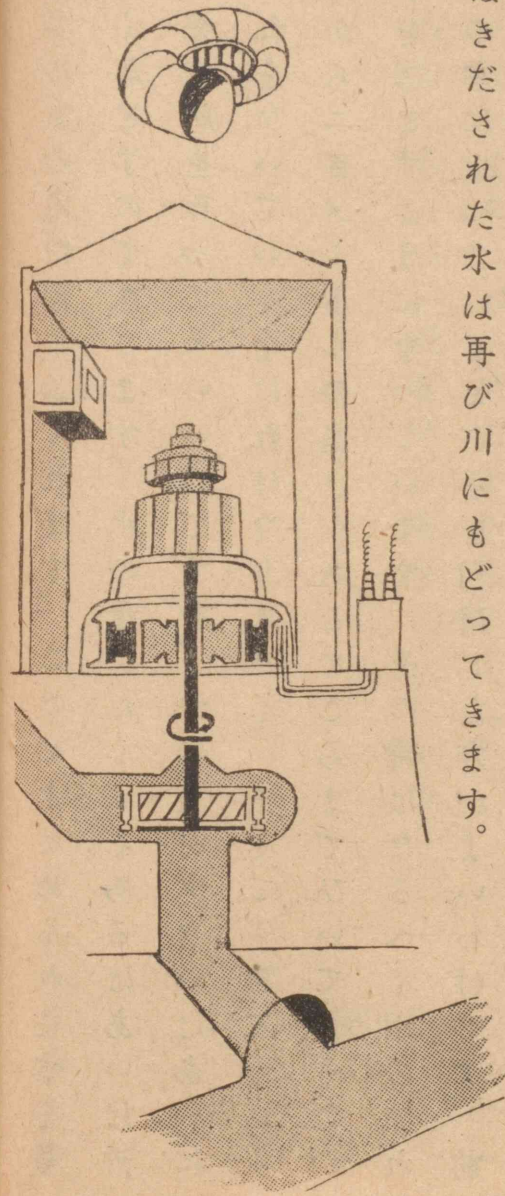
まず、川をせき止めます。せき止められた川は逆流してヘビ

がカエルをのんだ形にふくれます。このせき止められた水を勢いよく落とすのであります。水の量がたくさんあるばあいは近くに発電所を作ってもいいのですが、水の量が少ないばあいはそれをひいていかなければなりません。そして、百五十メートルから二百メートルの高さがあるところまでひいて、そこから水を落とすようになっていきます。その時はなるべく川の流れがUの字になっているところを利用して方がよいわけです。前のようにダムからすぐに落とすのをダム式、水路によって水をひいていくのを水路式といっております。

せき止められた水には、木のえだ、木の葉、すななどがはいつておりますから、それをとりのぞかなければなりません。きれいな水は、あの遠くからも見える太い鉄管からまっさ

かさまに落ちていくのです。鉄管のさしわたしは二メートルほどあるのがふつうです。その鉄管から勢いよく落ちた水は大きなね車をまわします。わたしたちの作った水車と同じ理くつです。このはね車の回転によって発電機をぐんぐん動かすわけがあります。

はきだされた水は再び川にもどってきます。



(二) トロツコに乗って

五月の朝、電車はまだぼんやりと電燈をともして走っている。みんなの目もぼんやりしている。五時始発の電車に乗って約一時間、大川の深い谷の入口についた。もう村の人たちは山に出かけるのであろうか。のこぎりやなたをしようとしたすがたがちらほら見える。山の東がわがあざやかな新緑にもえている。

そこから、トロツコ電車に乗りかえるのだ。トロツコを小さな電気機関車が引く。一台のトロツコに二十人ほど乗れる。それが四台続いていた。屋根はあるが、雨がふったらたいへんだ。ふきこんでびっしりぬれてしまふだろう。

ピーとかんだかい音をたてて走りだす。案外早いのでおどろ

いってしまった。電車なんかよりずっと気持がよい。トンネルがいくつも待っている。ひやつとするくらやみの中を、ゴーツとものすごいひびきをたてて走っていく。耳ががんとへんになる。

ぼくたちはいつの間にか、一年生のようにな

「今は山中

今ははま

今は鉄橋わたるぞと

.....
という唱歌をうたっていた。

太陽はぐんぐん上って、深い谷間にも光があふれている。シラカバの新しい細かい緑が目にしみる。

トロッコが通るたびにやわらかな木の葉や草がザワザワとなる。ぼくは見学のおしらせに先生がのせてくださった詩を、もういちど読みなおしてみた。

冬中 深い雪にうずま

いちめんまっ白く見えた北の山国にも

五月がくれば雪が消えます

それまで はだかの林の中で土の下で

ぐつとちぢまっていた葉や花の芽たちが

いっせいにのびをして動き始め

花はいちどに開いて散り

山々は急いで緑の着物を着るのです

まったくそれは不思議な変わりようです。

緑は日ましにくくなって

太陽は大声をあげて空のまん中でうたい

ミツバチは光の粉（こ）のように畑（はた）を飛び

カツコウはあちこちでよびあい

ホトトギスはかん高く鳴きながら

頭の上を過ぎてゆきます

北の国の夏はなんとにぎやかでしょう

さわのかやはらにワラビがもえるのも

がけのひかげにゼンマイが出るのも

このころです

谷川の流れのふちにはフキの葉がしげり

みねの高い岩はだには

ヤマウドがよきによきとのびるのです

子どもたちはけわしい岩をよじ 急な流れをわたって

どんなにあぶないところもおおそれずかけまわり

ヤマグミをとってくるのです

山深くわけいれば

春はまだどこかに残っているようです

ひんやり風の動く山と山とのくぼみのところ

木の間がくれにきらりと光った

あれはなんででしょう

ああクマがいたクマがいた

大きな白いクマがねていたよと

子どもたちは息せききってかけもどつてきます
だがそれはクマではありません
冬の雪が残っていたのでした

(まるやま・かおる による)

さわやかな風がぼくの手に持っている紙をはたはたとならして過ぎてゆく。谷の向こう岸は人の通れそうもないきりたった岩山だ。によつきりと天にせまっている。

トロツコがとまると、谷川の音がゆつたりと聞こえてくる。雪どけ水でにごつてはいるが、深みのある色である。ここから見ると動いていないような水が、何千年何万年という長い間に、かたい岩かべを深く深くえぐりとつたにちがいない。雪はそちこちの谷間に残っている。

雪が根もとにあっても、やはりえだには花がさいている。芽が出ている。



雪はほんとに大きなクマのように見えたり、鳥のように見えたり、ちようど空の雲を見ている時のような気がする。小さな虫どもはうるさく、かつてな音をたてている。

やがて緑の中にまっ白な発電所が見える。こんな山おくに、こんな近代的な建物が見られるとは思わなかった。この白い建物に鉄管がぐさつと三本つきささっている。トロツコをおりて橋をわたる。はき出された水がゴウゴウと足もとを流れてゆく。「やあ、みなさんいらっしゃい。お待ちしていました。」

発電所のおじさんたちは、ぼくたちの手紙を読んで待っていてくださったのだ。高い建物に案内されてはいると、ただ、ものすごい音ばかりで、何を言ってもおたがいに聞こえない。原理はぼくたちの研究と同じであるが、やっぱり来てみなければ

わかからないことが多い。静かなへやで話をきく。

「雪がふるとたいへんですよ。まあ、このあたりは何とかしのげますがね。この上流にも発電所が二つもあるのですから。そこはひどいですよ。ちよつとしたすきまでもあるものならふきこんできて、へやの半分は雪にうもれてしまいます。そして雪のとけるまで、村の方との連らくは全くなくなってしまうのだから、みなさんには考えられないことでしょう。おまけに雪がひどいと送電線が切れるのです。この修理がまたたいへんです。スキーに乗って、ふぶきの山の中をとんで歩くのです。みなさんの知らない、気のつかないところにだまって苦勞をしている人たちがたくさんいるのです。これから、ダムの方に案内しますが、そのダムのコンクリー

トの中にもへやがあつて、そこに出はいりしている人もあるのです。あのダムにひびでもはいつたらそれこそたいへんですからね。ダムの水があふれて下流の村の人たちや作物に損害をだしますからね。たえず、そうしたことに気を配っている人がいるんですよ。

外に出てみると、けわしい山なみにどこまでも続いている送電線の鉄とうがいくつも見える。あんなところに、あんな大きなものを建てることができるのだらうかと、ほんとにおどろくばかりである。ここにも数多くの人たちのぎせいと努力があつたのだ。

これからは歩いていかなければならない。今までトロツコに乗っている時は気がつかなかったが、この山道に平行してコンクリートの小さなトンネルが山のはらにつくりつけられて続いているのを発見した。雪のため道がうずまつてしまった時、この暗いトンネルを利用するのであらう。ダムまでは四十分ほどかかった。

ここはまさに湖水だ。人工湖水だ。大きなけものがじつと息をひそめてひそんでいるようなすごさだ。その大きなけものをぐっとおさえているのは、白く光っているコンクリートのダムだ。ただその大きいのにあきれるばかりだ。

教室でわたしたちが想像していたのはまるでちがつっていた。自然もおそろしい。しかし人間の力もまたすごい。

四 わたしたちの読書

(一) 図書係

わたしが学級文庫の係にえらばれたのは四月でした。もう夏休みが近づいています。その間に係として感じたことがいくつかあります。まず、わたし自身が本をすきになったことです。四年生まではそれほどありませんでしたが、図書係に選ばれてから、本をせい理したりしているうちに、本の名まえを覚えたり、すっかり本を読むことがすきになりました。週に一ぺんずつ、先生から読書についての話を聞くのも楽しみでした。

かつあわ（勝安房）が本を写した話、リンカーンとワシントン伝、らん学者たちの苦心、アラデイーやフランクリンの少年時代、また先生の小学校時代にはどんな本を読んだかというような話はいつまでもわすれられません。

読書日記を開いてみると、その時の教室のようす、先生の顔が目にくかんできます。

それから、係にならない時にはそれほど思わなかったこと、たとえば、約そくの日までには必ず本を返す、きたない手で本をあつかわない、ページを折ったり、書きこんだりしてはいけないといったことが、ほんとにそうだと思われるようになりました。

お願い

- 一 学級文庫の本は全部お返し下さい。
- 二 読書カードもお出し願います。
- 三 二十日の午後に本のやぶれをつくらいたいと思えますから、はさみ、のりを用意してきて下さい。
- 四 夏休みには毎週土曜日（曜）の午前九時から十二時まで開いています。貸し出しは一週間に一さつおつにします。

七月十五日

図書係

図書係は集まった読書カードをせい理してみました。

いちばん数多く読んだ人は九十さつ、そしてこの組の者は平均十五さつを読んでいることがわかりました。いちばん読まれた本は四十人に、つまり組の九十パーセントの者に読まれた本が五さつもありました。

読書カード

(9) 五月六日

やまだマサコ

書名 アルファスの少女

感想 ハイジという少女のすなおな気持ちに時々なみだぐみしました。美しい自然と美しい心ですっかり感ぜきました。

(二) 読書について

先生の話

えど（江戸）時代の長いさこく（鎖国）のあと、初めて外国と交通するようになって、正式にアメリカにわたった一行がある。その船はかんりんまる、航海長は勝安房であった。

勝安房という人は、ばくふの家臣ではあったが非常に進歩的な人であり、日本の夜明けに力をつくした人のひとりである。この人はわかいころからたいへんな読書家であった。

ある日、本屋でオランダからきた新しい本を見つけた。当時オランダの学問をしていたかれにとってはずいぶん買っておきたい本だった。だが、それを買うだけのお金を持っていなかった勝



安房は、本屋のあるじに、今お金をつくってくるから、だれにも売らないでとっておいてくれとたのんでいった。いっしょうけんめい知りあいのところを歩いてお金をくめんして本屋にかけた時には、もう売れてしまったというので、あきらめきれずに、すぐ買った人をたずねあてて、それをぜひゆずってくれとたのんだが、ことわられてしまった。無理にそれを貸してもらおうようにたのみこんだ。といつても、持ち出してはこまると言われたのでその人がねてから、よく朝までを利用して、それを書き写すことをゆる

してもらった。その家までは一里半もあった。毎日かよい続けて、半年もかかってその大きな本を書き写してしまった。

この熱心さにはその人もしたをまいて、この本はわたしが持っているより、あなたが持っていた方が、価値があると言つてゆずってくれたという話がある。

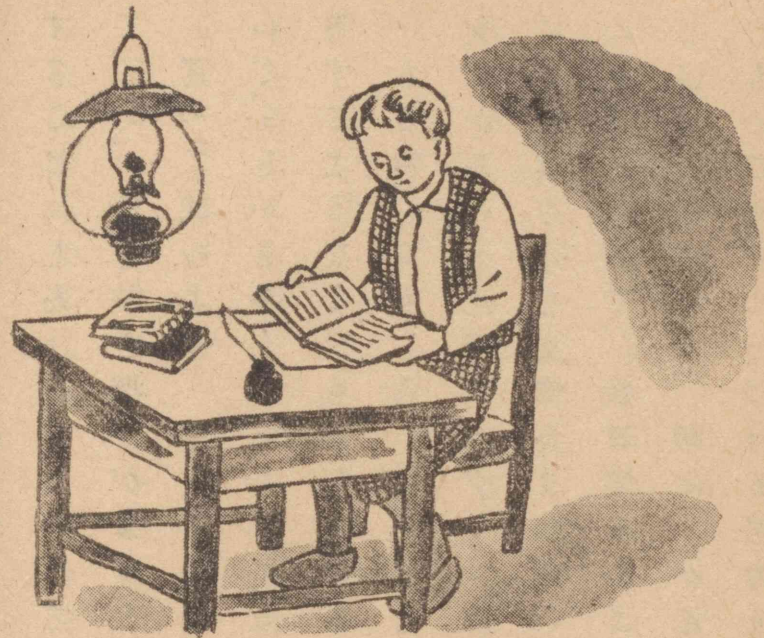
フランクリンはアメリカ建国のために、努力した人であり、またあのらい雨の日にしたことをあげて、電気の実験をした人である。

フランクリンは小さい時から本を読むのがすきて手にはいるお金はみんな本代にしてしまった。そのうちでも航海のものがたりがいちばんすきだった。

父はフランクリンのさかんな読書熱におどろいて、印刷屋にすることにした。そのおかげで本屋とすっかりなかよしになつて、いい本を読む機会が多くなつた。

買って読むより、借りて読むことが多かつたので、よごさないで、しかも早く返すことに気を配つた。だから夜どおして読書するようになつた。

ある時、おもしろい古雑誌を手に入れることができた。その文章がたいへんフランクリンの氣にいつて、フランクリンは、できればこんな文章をまねたいと思つた。それで、その要点をぬき書きにして、数日間そのままにしておき、それから、こんどは本を見ないで、頭にうかんでくるところをまとめ、なるべくもとの文章に近づける努力をしてみた。それを原文とくらべ



て、まちがいを直した。じぶん
がいかにかことばを知らないか、
また知っていることばでも、な
かなかかんたんに思いだして使
えないことがわかった。

またある時には、ぬき書きの
順序をわざとごちゃまぜにして
おいて、何週間もたつてから、
まずそれを正しい順序に直し、
それからちゃんとした文章につ
づつてまとめることをやってみ
た。これは考え方をせい理する

方法の勉強に非常に役立った。原文を調べてみると、じぶんの
文章の悪いところがいつぱいで、直さなければならぬことも
あったが、ある時は、原文の言いまわしやことばづかいよりも
よくなっていると思えるところもあつて、気をよくしたことも
あつたそうだ。

フランクリンは、はげしい仕事のあいまとか日曜日でなけれ
ば、だいすきな作文や読書を続けることができなかつたのであ
る。

(三) 本 の 話

初めて読む本を手にした時、たいていの子どもは、本の名ま

えを見ると、もう待ちきれないようにすぐ本文を読み始めます。中には、その本を書いた人の名まえくらいは見て読む者もありますが、あまり多くはないようです。

こうして、つぎつぎずいぶんたくさんの本を読みますが、さて、本についての知識は案外少ないのでおどろきます。わたしたちの家について考えてみても、表さつや住んでいる人たちはそれぞれがいますが、入口や、げんかん、ろうか、ざしき、台所、木戸などはたいていあります。それにその家を建てた年月も、建てた人もわかっていません。

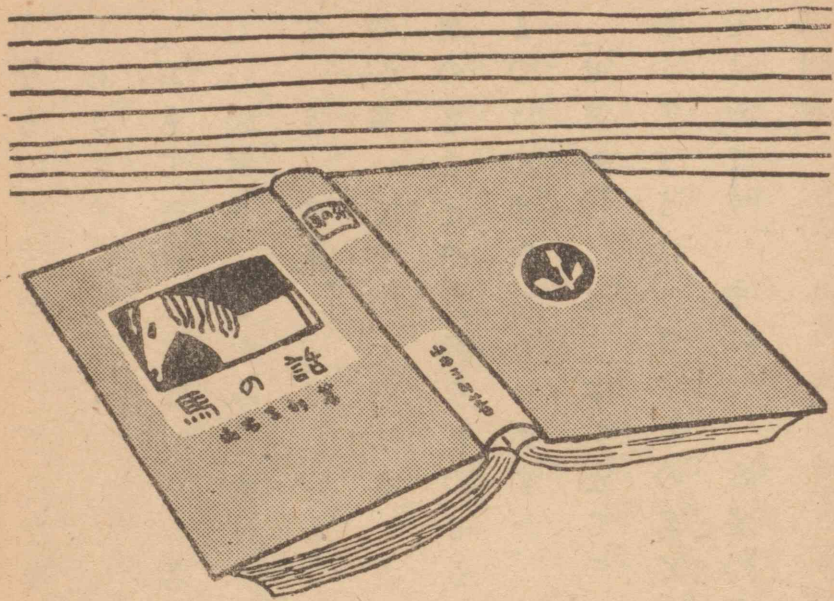
本もこれと同じように、本の名まえやそのなかみはそれぞれちがいますが、その作り方や、よび名などにいろいろなきまりがあるのです。さあ、これから、実際に本とくらべながら、い

ろいろ調べてみましょう。

○表紙

本の表とうらにつける紙や布のことです。紙ではったのは、「紙表紙」、布ではったのは、「布表紙」といいます。また、「おもて表紙」と、「うら表紙」と、「せ表紙」に分けてよぶこともあります。

表紙は、ちようと本の顔のよ



うなものですから、どんな本でも、表紙は美しくしつかり作ってあります。

「おもて表紙」には、本の名まえと本を書いた人の名まえを美しい図案や、なかみを表わす絵といっしょに出すのがふつうです。「うら表紙」には、「おもて表紙」から続いた絵や図案があるのが多いですが、中には、ここを白くしておいて、出版した本屋の名まえや定価などのせるものもあります。あなたの今見ているのはどうなっていますか。

「せ表紙」には、本を立ててならべた時に、本の名まえがすぐわかるように、まず本の名と、本を書いた人、つまり著者の名を入れます。中には、本屋の名やマークの、はいったものもあります。

これらの「せ表紙」に印刷された文字を、「せ文字」とよんでいます。本のせなかに書かれている文字という意味ですね。

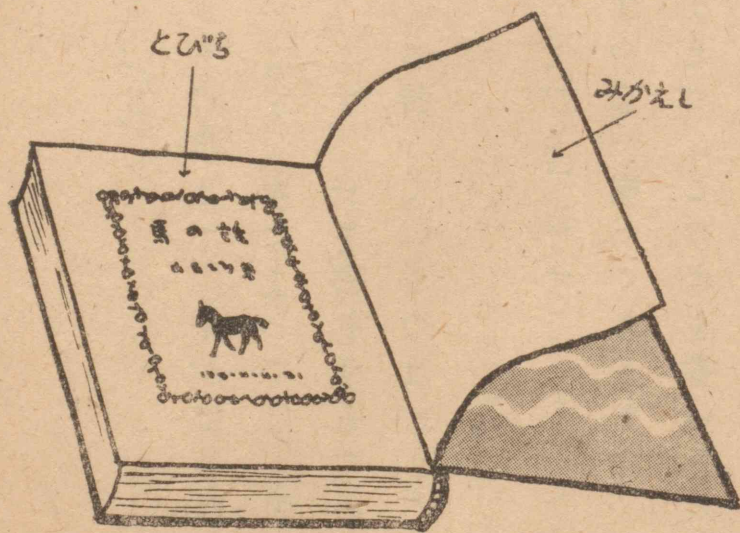
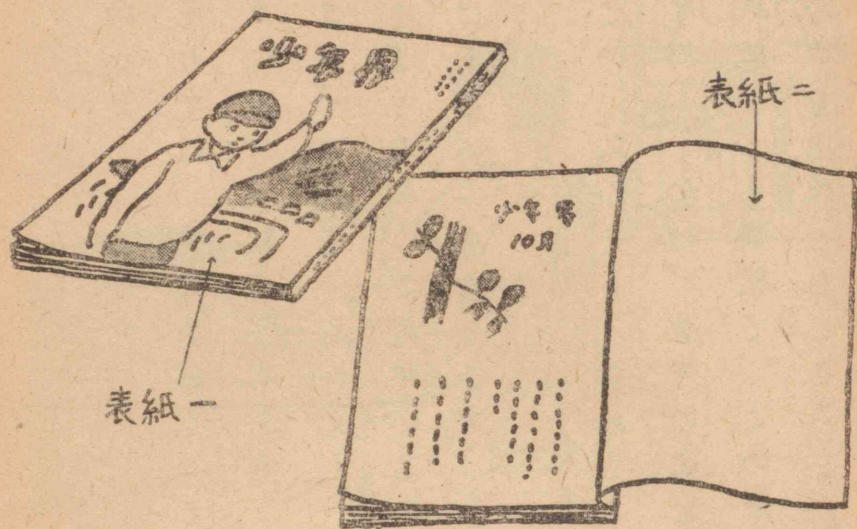
では、ついでに雑誌の表紙も調べましょう。

たいていの子どもの雑誌は、本文をはりがねでとじて、その上に表紙をかぶせて、「せ」のところをのりづけにしています。

本の「おもて表紙」にあたるところを、「表紙の一」とよんで、ふつう上の方に左横書きで、その雑誌の名まえを入れます。

それから、その下には発行の月を入れて、何月号かはっきりわかるようにしています。雑誌の名まえの下には、ふつうきれいな「表紙絵」を大きくとっています。

これは、ふだんあまり気をとめて見ないのですが、表紙の上か右はしの方に、じゃまにならないように、小さな活字で印刷



したところがあるでしょう。よく見てごらん下さい。
 たとえば、……………昭和二十六年一月二十六日印刷
 納本 昭和二十六年二月一日発行（毎月一回発行）第五卷第二
 号 というようなことが刷ってありますね。これは、どの雑誌
 でも入れることになっています。
 この中に「第五卷第二号」とありますが、第五卷というのは
 なんのことでしょう。「巻」というのは、むかし、巻きものにな
 っていた本を数える時に用いたものです。一卷二巻という数え
 る単位だったのでですね。それが、明治二十年ごろから、一卷と
 いうと、十二さつ分、つまり毎月一さつずつ発行して一か年分
 を意味するようになったのです。ですから、「第五卷第二号」と
 いうと、第五年目の第二さつ目にあたります。

○みかえし・とびら

それでは、表紙をめくってみましょう。

次には、表紙のうらから二ページ分の広さで、紙がはられています。これを「みかえし」といいます。本によっては、図案やもようを刷りこんでいるものもあります。紙を節約するためにつけてないものもあります。みなさんの持っているのはどうですか。

この「みかえし」をめくると、「とびら」です。

「とびら」には、著者の名と出版者の名が刷ってあります。

表紙とうら表紙で、この本の名まえと、この本を書いた人やこの本を出版したところを、まず頭に入れておくことがだいじ

です。

○著者

著者というのは、この本のなかみになっっているげんこうを書いた人のことです。本を印刷したりとじたりして作った人ではありません。みなさんが学校で作文を書くとき、その作文の作者はみなさんです。同じように、本の著者というのは、その本の作者ということです。

ふつう一さつの本の著者はひとり



ですが、ふたりのことも三人のこともあります。一さつの本にふたり以上著者がある場あいは、「共著」といいます。いっしょになってこの本を書いたという意味ですね。

このほかに、「編者」「選者」「訳者」というのもあります。みなさんの読んだ本の中にもあるかもしれません。どんな意味でしょうか、調べてごらん下さい。

さあ、それでは「とびら」をめくりましょう。

○くち絵・まえがき

子どもの本では、ふつう「とびら」の次に「くち絵」という美しい絵がはいっているようです。絵の代わりに写真のはいつているのがあります。本文には、ふつう色のつかないさし絵が

ありますが、「くち絵」は色ずりが多いようです。雑誌のばあいは、グラビヤという写真印刷がはいることもあります。

この「くち絵」をめくると、その本の「まえがき」があらわれます。

著者が、この本をどういうふうと考えて書いたか、どんなふうにしてこの本ができたか、なかみのこの部分はこういうつもりで書いたのであるというふうな、著者から読む人たちへの初めのあいさつです。これを「まえがき」とも「序文」とも言っています。「序」というのは、始まりの意味です。だからこれはいきな文なのです。いきなり本文から読み始めるのは感心しません。

まず、この「まえがき」をよく読んで、著者の考えを知った

り、本のなりたちを知っておくことがたいへん役にたちます。また、本文を読んでもよくわかるのです。

みなさんも、これからは本文を読む前に、必ず「まえがき」に目をとおすようにしてください。

もくじ

- 一 読書クラブをつくらう
- 二 子ども読書会
- 三 学校の図書館
- 四 図書館見学
- 五 本のできるまで
- 六 本のちしき
- 七 むかしの子どもの本

もくじ

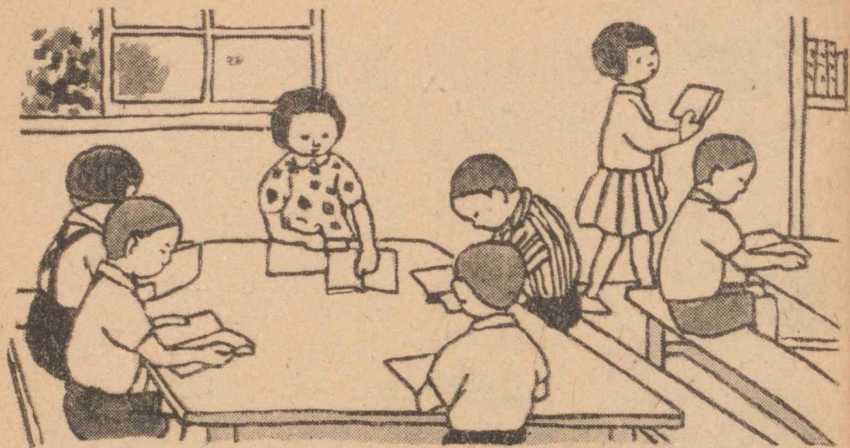
「もくじ」を見ると、その本のなかみが、どんなふうに組み立てられているかよくわかります。

一度読んだあとで、「あのことはどこにあったかなあ。」などと、そこだけをもう一度読んでみたい時がよくありますね。

そんな時には、「もくじ」はたいへん役にたちます。ずっとあとになって、何か調べたりする時、一ページごとにめくってみななくても、「もくじ」によってすぐ見つけたことができるのです。

さし絵

「さし絵」は、本・雑誌・新聞などの本文中にさしはさんで入れる絵です。よいさし絵は、本文を読者にわかりやすく伝えるばかりでなく、文といっしょになって、著者の表わそうとする考えを、読者の心にはつきりひびかせることに大きな力があります。ですから、本を作る人は、小さな一まいのさし絵にも細かい心を使っていいものにしようと努力します。この国語の本もみんなそうです。みなさんも、本文とよく結びつけて、い



日本でも、これからできる本には、きつとみんなつけるようになるでしょう。そうなれば、みなさんがいろいろの勉強を進めていくのに、すばらしく役にたつことと思います。

「さくいん」の見方や使い方についてよくわかっていいる必要がありますね。

まだまだ本についてはいろいろのことがありますから、ときどき、みんなて話し合ってみるとおもしろいですね。

ねいに見てください。

「もくじ」のページが終ると、たいてい本文になります。

本文が終ると「あとがき」というそえ書きのある本もあります。

す。

○さくいん

これは、その本に出てくるおもなことばを五十音順に集めて、そのことばについて書いてあるページをしめして、本を読む手引にした表をいいます。

日本の本では、おとなの本にいくらか見られますが、外国では子どもの本でも、ほとんど「さくいん」が最後にのっています。

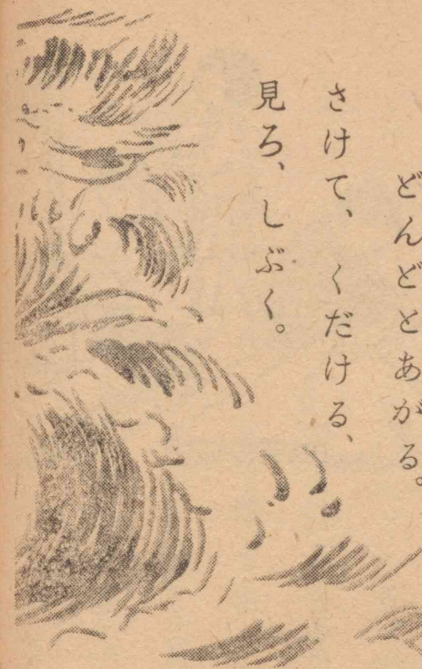
五海と空

(一) 波うちあがる

波うちあがる、見ろ、岩を、
波はさかまく、

どんどとあがる。

さけて、くだける、
見ろ、しぶく。



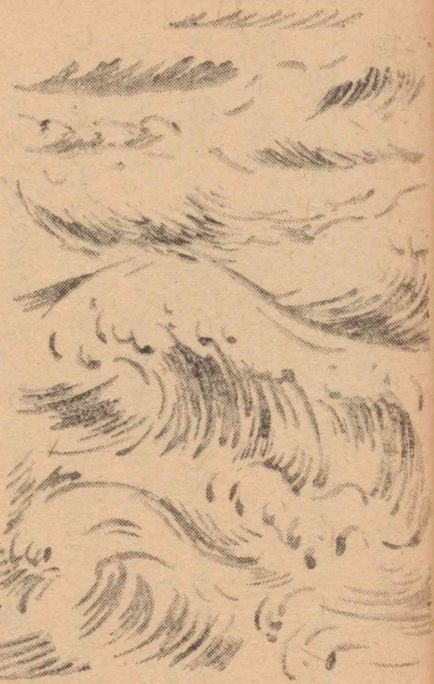
波うちあがる、見ろ、岩を、

岩は黒岩

どどどとひびく。

立てよ、がんばれ、

見ろ、ぼくを、



波うちあがる、見ろ、

岩を、波はさかまく、

どんどとあがる。

さけて、くた

ける。見ろ、

しぶく。

(きたはら・はくしゅうによる)



波うちあがる、見ろ、しおを、

しおはうずまく、

ざぶらんらんと。

ちようど日の出だ、

見ろ、あがる。

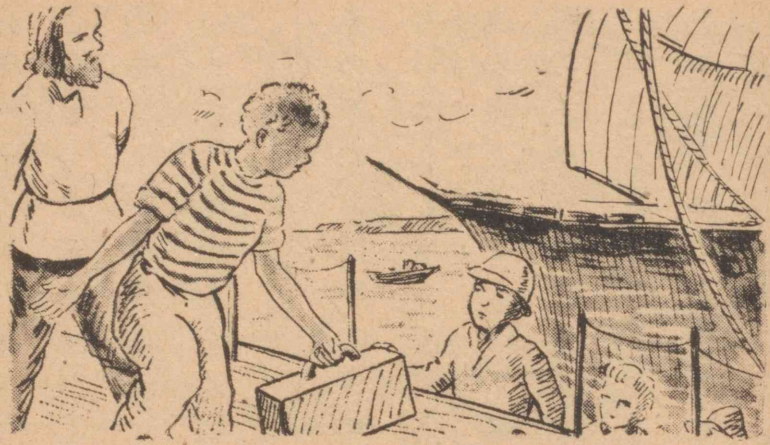
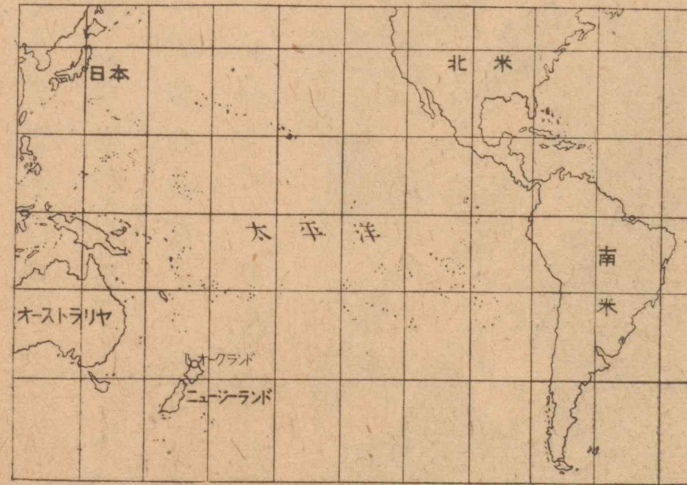
(二) 十五少年

……これはげん燈です……

「十五少年」は、もとフランスのジュウール・ベルヌという人の書いた本です。ここにのせたのは、げん燈にするために、それを書き直したものです。

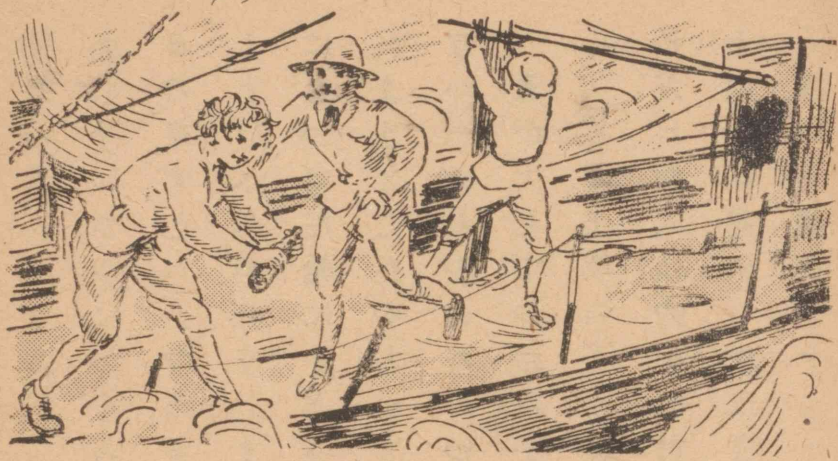
十五人の少年たちが、思いがけない災難にてあつて、身も心もひっくり返りそうな時に、ちえと勇気とをもつて、うまく災難をのがれ、その後もおたがい協力して、苦しい二年間を無事きりぬけたことがよく書いてあります。

場所は南半球です。日本とは四季がちようど反対になつてゐるのもおもしろいですね。



(1) オーストラリアの西南に、ニュージラードという島があります。都オークランドに千八百六十年の春がおとずれて、チエイマン学校の生徒たちは楽しい夏休みをむかえました。中でも、ゴルドンたち十四人は、スロー号という船に乗せてもらつて、島を一周することになりました。

あした出ばんという、二月十四日の夕方、十四人の少年はそろつて船に乗りこみました。副船長と給仕のモコーが喜んでむかえてくれました。船長と水夫たち



(3) 不安の一夜が明けました。風はますますふきつので、船はどんどん東へ流されるばかりです。少年たちの中で、ブリアンがいちばん航海のことを知っていたので、みんなはその言うことにしたがって働きました。一方、じぶんたちの災難を書いた紙をびんの中に入れて流したりしました。なんといいはかない望みでしょう。

風にもまれ、しおにまかせて、ゆくえも知れずただよう船。日ごとに高まりいく不安におののく十五の小さなたましい。

は町へ行って、るすでした。副船長は少年たちをベットに送りこむと、自分も上陸して、町へ遊びにいつてしまいました。

(2) モコーが夜中にふと目をさましますと、みように船がゆれています。急いでかんぱんにかけあがってみました。

「たいへんだ」

その声に、ほかの少年たちもとび起きて来ました。

いつ、どうして、こんなことになったのでしょうか。船は風にふかれて流されているのです。港からだいぶはなれたらしく、町のあかりも見えません。月もないやみの夜です。

声をかぎりに助けを求めましたが、なんの答もありません。

少年たちは力を合わせてほを張ろうとしましたが、子どもの力ではおよびませんでした。

(4) 黒い雲、うなる風、どっとおしよせる波、木の葉のようなスロー号。ついにおそろしい大暴風がやって来たのです。三月九日の夜でした。マストは折られ、ほ布はひきちぎられ、救命ボートはさらわれてしまいました。年上の四人の少年たちは必死になってだ輪にかじりついています。波のためになんどさらわれようとしたかわかりません。夜が明けたら風がやむかもしれない。それがただ一つの望みでした。

東が少しずつ白みかけてきました。が、風はやはりやみません。その上深いきりがあたりを包んでしまいました。「ああ、だめだ。」四人は力がぬけていくような感じがしました。その時、モコーが急にさけびました。

「陸が、陸が。」

(5) モコーの指さすところ。

「陸だ、陸だ。ほんとに陸だ。」

四人は喜びの声をあげました。きりの間から、なつかしい陸地が見えるのです。さいわいなことに風はその陸地の方へふいています。一分。二分。五分。十分。陸に近づきます。

森の緑、土の色、岩のすがた。十五人の心はどんなにおどつたことでしょう。

その時、ひととき大きな波が船のうしろの方でまっ白い頭をあげたかと思うと、ドドーンと船にぶつかってきました。

グググツ・ゴリゴリツ。

船はものすごい音をたて、あばれウマのように走りだしました。少年たちはめまいがして、「もうこれまでだ。」と思いました。

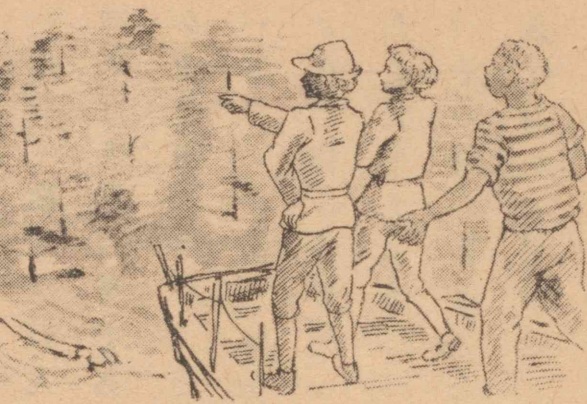
(6) 気がつくど、どうでしょう、船は一気にはまべまで運ばれて
いました。遠くから見えていた緑の森は目の前にきています。

「ここはどうやら無人島らしいね。」

じつと陸を見ていたゴルドンが言いました。

「うん、とにかく見てこよう。家があれば
いいなあ。」

ブリアンとゴルドンは船をおりて、近くの
陸地を調べにいきました。



しげった大木、たおれてくさった木、積
み重なった落葉。森の中はしんとしていま
した。家になるような所ありません。

当分、船をすまいにすることにしました。

(7) あくる日、少年たちは船の中の食物その他の品物を調べまし
た。食物はけんやくして使えば、あと二月はささえることがで
きそうです。しかし、いつまで待つかわからないのに、ただた
べてばかりはいられません。それで小さい者にはつり道具を作
って魚を取らせ、年上の者はてっぽうでけものや鳥をとること
にしました。その年のこよみがひとつありました。バクスター
は、これについて日を思い出しながら、今までのことを書いて
おくことにしました。

(8) いったい、ここは大陸の地続きだろうか。はなれ島だろうか。
ともかく、森の中には、マツやヒノキのほかにはあまり青いも
のが見えないことから、ニュージールランドよりも南によった土
地らしいことは考えられました。そうすると、ここの冬はずい



ぶん寒いにちがいありません。

ブリアンはモコーとともに、こうりの中から水夫の着物を取り出して、小さくぬいなおしました。それはぶかつこうなものでしたが、冬の寒さを防ぐにはじゅうぶんだらうと思われました。

(9) 三月十五日、ブリアンはひとりて森のそばの岩山によじ登りました。この上から見たら、島が大陸かわかるかも知れな
いと思つたからです。

まず、東の方をながめました。おくの方は山らしいものもな
く、一面の森です。北の方は足もとから十三・四キロメートル

の間は、波の白くくだける海岸線が続いて、みさきがあり、み
さきの向こうには、広々としたすな原らしいものが見えます。
南をみると、海岸はだんだん東南へ折れ、はまべの内がわは、
ぬま地になっています。

もう一度、東を見ました。

「おや、あれはなんだらう。」

続く森のはてに、北から南へかけて平らにたなびくうす青いも
のが、目にうつつたのです。

(10) 「海だ。海なんだ。」

ブリアンはあやふく手に持った望遠鏡を落とすところでした。

あれが海だとしたら……ここは、はなれ島ということになる。
ブリアンの報告はみんなをがっかりさせました。

しかし、ドノバンはそれを信じませんでした。そこで、ブリアン、ドノバン、イルコクス、サービスの四人でたんけんをする事になりました。フハンというイヌも連れていく事になりました。ブリアンの見たのがほんとうに海なのかどうか、たしかめにいくのです。

森の中を進むのはたいへんなほね折りでした。森の中で一夜を過ごし、あくる日十時ごろ、やっと森をつきぬけました。

「ああ、やっぱり海だ。ここは島なのだ。」

四人はがっかりしました。すると、イヌのフハンが水ぎわへかけていってベチャベチャとさもうまさうに水を飲み始めました。(11) おどろいた四人が、ためしに飲んでみると、それはま水でした。海ではない、湖です。それにしても、なんと広い湖だろう。



四人はひとまず湖の岸をまわって南へ進むことにしました。しばらくいくと、湖から流れ出る小川があったので、それにそって下っていきました。

とちゆうまで来ると、フハンが急に地面にはなをすりつけて、何かしきりにかぎまわるようすを見せましたが、そのうち右手に向かってかけだしました。

「フハン、どこへいくんだ。」

四人はイヌについて走りまわりました。イヌは切り立った岩ぺきのところでとまりました。いってみると、岩ぺきの面には、ほらあなの入口らしいものがありました。

(12) ブリアンたちはたいまつに火をつけ
そろそろとほらあなにはいつていきま
した。中はかなり広くなっています。

「おや、テーブルだ。」

「ナイフもあるぞ、こんなにさびて。」

「コップだ。」

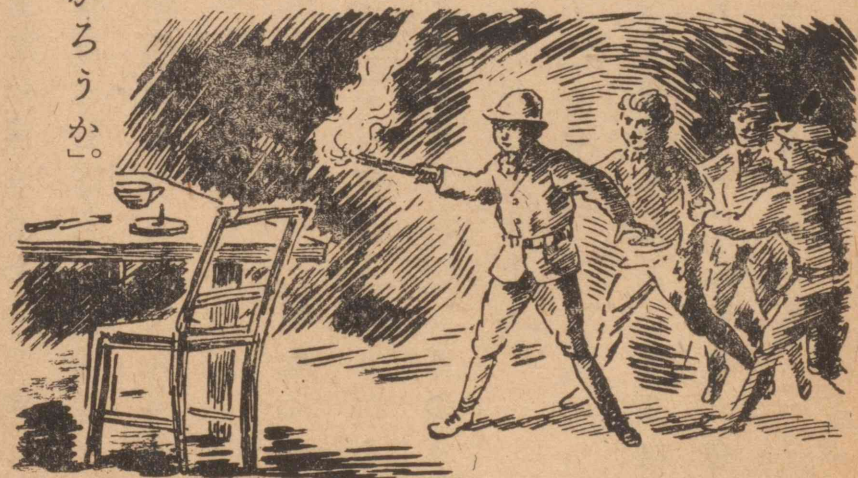
こしかけ、ろうそくたて、おの、つち
などもありました。

「たしかに入がいたんだね。」

「どうしたのだろう。もしや、ここは

大陸続きで、無事に帰ったのではなからうか。」

「あ、ここに地図がある。」



(13) 「この地図だよ。このあなにいた人が書いたんだね。」
その地図は湖といい、川といい、少年たちが調べたのと同じ
していました。また、湖の東は陸地がそれを囲み、そのまた東
は海になっていました。

「やっぱりここは島なんだ。がっかりしたねえ。だけど、この
あなはぼくらが住むのにもちようどいい。」

「うん、水は近いし。」

「寒さは防げるし。」

「早く帰って、みんなに知らせよう。」

相談の結果、十五人の少年たちは、この新しい家に移り住む
ことになりました。十五人は力を合わせて船の物を持ち出して、
いかだに乘せ、小川をのぼりました。あの小川はちようどスロ

1号の流れ着いたわんに注いでいたのです。スロー号はそのあと、あらしのためにもまたこわされてしまいました。

(14) 冬がせまって来たあるばんのこと、少年たちはストーブを囲んで、この島のところどころに名をつけました。

スロー号の流れ着いた所……スローわん
ほらあなの前の川……ニュージランド川

〔チエイマン島の略図をかいてごらんさい〕

湖……家族湖

岩べき……オークランドおか

島の名はコスターの発案でチエイマン島と名づけられました。

(15) つぎには島のかしらを選ぶことになりました。ドノバンはじぶんになりたいと

思いましたが、ブリアンの方が人気があるので、心配でたまりません。ところが、ブリアンはいきなり言いました。

「ぼくはゴールドン君がいいと思う。」

年上で考え深いゴールドン。みんな手をたたいてさげびました。

「賛成。」「賛成。」

ゴールドンは、一年たったら別の人がなるといふことで、引受けました。

(16) 六月の末になると、雪がふってしだいに積りました。

寒さははげしいし、魚や鳥も取れないので、心細い日が続きました。水をくみにもいけません。そこで、バクスターの考えで、土管をうずめて川の水をほらあなの中に引入れることに成功しました。あかりのために使う油は、モコーが動物から取つ

てたくわえました。たき木が少なくなると、少年たちはテープルをさかさにしてそりの代わりとし、それに森のたき木を積んで帰りました。勉強もしました。これは上級生が下級生に教えてやるのでした。

七月の気温は〇度以下十七度くらいまでさがりました。

(17) 九月十月となり、だんだんあたたかくなって、少年たちはまた森や川へ出かけました。おとしあなやわなでけものたちをいけどりにすることも覚ええました。つかまえた動物たちのために、わざわざ小屋を作っておきました。

サービスはおとしあなでダチヨウをいけどりにしました。それをならして乗るのを楽しみにしていました。ある日いよいよ乗ってみることになりました。ダチヨウにたづなをつけ、その



せにひらりとまたがりました。ところが、ダチヨウは大きくからだをゆすぶって、せ中のじゃま者をすんとふり落してしまいました。みんながおどろいたり、おもしろがったりしている間に、ダチヨウは森の中へにげていってしまいました。(18) こうして、クリスマスも過ぎ、新しい年をむかえました。島のようにすもんだんらんわかってきましたが、いつ帰るといいうあてはまったくつきません。そのうちにまたストープの季節が近づいて、わたり鳥もあたたかい国へ飛んでいくと見えて、日ましに少なくなります。少年たちはつば

めをつかまえては、そのくびに手紙を入れた小さなはこをつけてにがしてやるのでした。手紙には、自分たちが流されたことから、助け船を待っていることを書き、さらに、

「この手紙を拾った方は、すぐにニュージーランドの都オークランドにお知らせください。」

と書きそえたのです。

(19) ゴルドンは、この冬でひとまずかしらとしての役目が終り、代わってブリアンが選ばれました。ブリアンは少年たちにしんせつをつくし、いばることもなく、じぶんから先になって働きました。ゴルドンも進んでブリアンの言いつけにしたがいました。ドノバンもついにはブリアンのまごころにうたれて心から協力しました。しかし、もう二年近くもたち、まだこれからど

れほど待つことやらわからないことを考えると、少年たちの心はとかくしずみがちになっていくのでした。

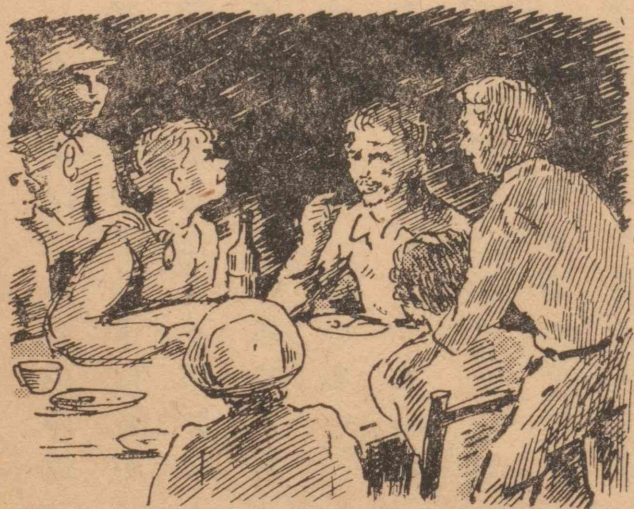
冬も去り、春も終りの十一月の末のことでした。入口の所で、

「もし、もし、助けてください。」

とよぶ声がしました。

(20) 「だれだろう。」

みんなが出てみると、ひとりの男が息もたえだえにたおれています。服を着かえさせ、食物をあたえたりしますと、だんだん元気になってきました。その男は少年たちに聞かれるままに、ぼつぼつ話しました。



その人の名はイバンスといました。イバンスはある船の運転士でした。サンフランシスコから南アメリカのチリーにむかうとちゆう、どうしたわけか船火事が起こりました。イバンスたちはボートに乗り移って難をのがれましたが、そのあと、あらしにあい、ボートはくつがえってしまいました。さいわい、ボートがしずまなかつたので、それにつかまっているうち、運よくこの島にうちあげられたというこゝとでした。

(21) イバンスの話は続きます。

「この島はアメリカ大陸とはたった五十キロメートルくらいしかはなれていないのです。」

「えっ、大陸と五十キロメートル。」

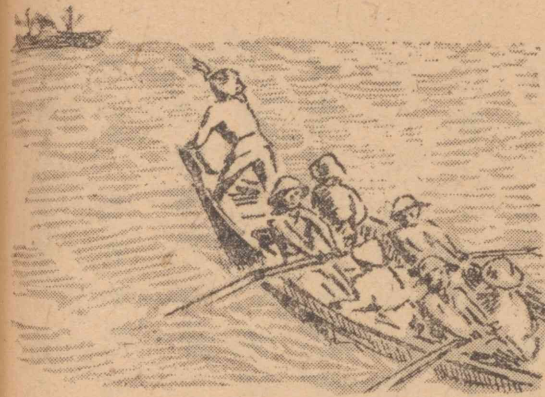
少年たちの目はいつせいかかやきだしました。

「そうですね。わたしが乗って来たボートを直しさえすればわけなくわたれます。あなたがたはここをどこだと思っているのですか。」

「太平洋の中の無人島でしょう。ぼくたちはチェイマン島という名をつけたんです。チェイマンはぼくたちの学校の名です。チェイマンか。なるほど、そうすると、この島には、古いのと新しいのと二つ名がついたわけですよ。世間では、この島をハノーバル島と言っているんですからね。ハツハツハツ。」

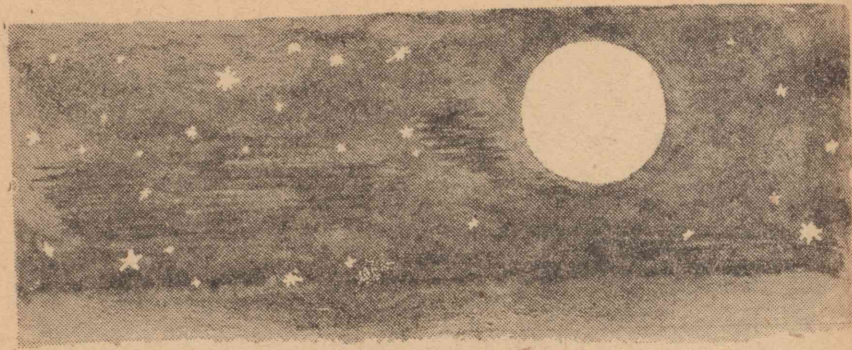
(22) 帰れる、帰れる。

少年たちは、ボートの修理と荷物の整理にいっしょうけんめいでした。クリスマスも正月もゆめのように送ってしまいました。



二月五日の朝、船はほをあげてニュージールランド川を下り始めました。もう再びここへ来ることはあるまい。ほらあなよ、川よ、おかよ、かつていた動物たちよ。さようならさようなら。(23) ボートは南アメリカへいくとちゆう、オーストラリア行の汽

船にであいました。船長は少年たちの話を聞いて、一昨年、ふしぎな事件として新聞に書かれていたスロー号のことを思い出しました。そして、わざわざ航路をかえてオークランドに送ってあげようと言いました。二月二十五日、まる二年ぶり、十五人の少年は無事なつかしいオークランドに帰り着くことができました。



(三) 大空をあおいで

晴れた秋の夜、広々とした空に大きな月が上る。

「おにいさん、月の世界にいつてみたくない。」

「いつてみたいな。ロケットに乗って。」

数かぎりない星がまばたきをする

ようにきらきら光っていた。

「よしこ、月の引力は地球の何分の一か、知っ



「ているかい。」

「六分の一でしよう。」

「そうだ。月の世界で野球をやったら、どうだろう。」

「おにいさんがカーンとホームランを打つと、地球のときの六倍も飛ぶことになるのね。」

「うん、でもカーンという音は出ないんだよ。月の世界には空気がないから、音が伝わらないのだよ。」

「つまらないわね。お話もできないんでしよう。」

「あつ、流れ星だ。」

「おにいさん、星の話の続きをしてくださいませんか。」

「北斗七星を見つけてごらん。」

「大きなひしゃくをぶらさげたようね。」

「この七つの星のある星座を知っているかい。」

「大グマ座でしよう。」

「グマに見えるかね。」

「むずかしいわね。」

「大グマ座について、いろいろな伝説があるのだよ。その一つを話してあげよう。」

クマは北斗七星のますの四辺形だけで、えの三つの星をそれを追っているかりうどと見るのだ。そればかりでなく、



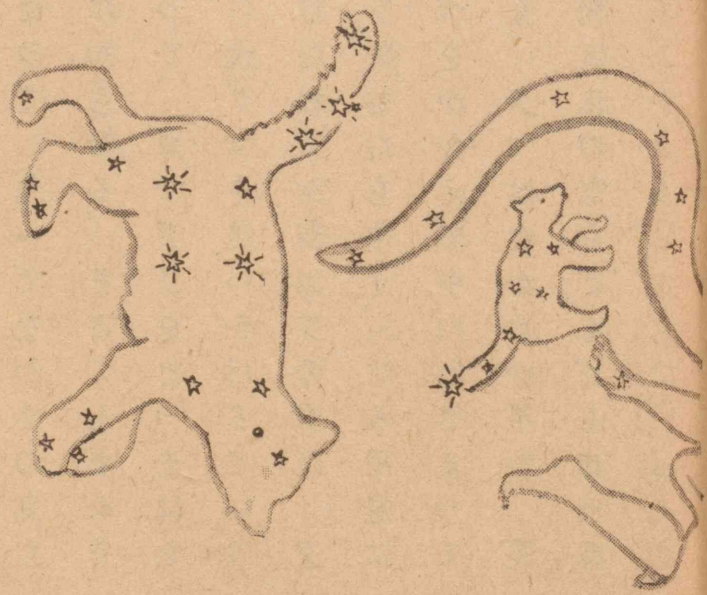
北斗のえをのばしていくとウシカイ座という星座があるはずだ。見つけてごらん。

「あの四つほどならんでいるのでしよう。」
「そうだ。この四つの星もかりうどと見て、七人がそろって空のクマがり始めることになる。また、ウシカイ座のそばに、カムムリ座の六つの星が半円形にならんでいるね。あれがクマの住んでいるほらあなだね。」

「よく考えたものね。」
「ところで、この七人のかりうどはみんな小鳥で、それが星の大きさと色から名がきままっているのだ。」

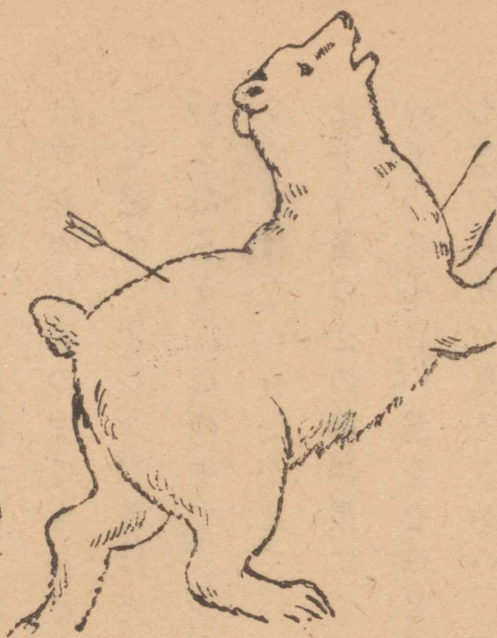


コマドリ、シジュウカラ、シカドリ、カケス、ハト、フクロウ……というようにね、フクロウはウシカイ座の中でもっとも大きな星で、オレンジ色に光っているだろう。この中で、シジュウカラはなべをかかえている。北斗七星のえの第二星にくっついていて、小さい星をなべと見たんだがあれが見えるかい。」

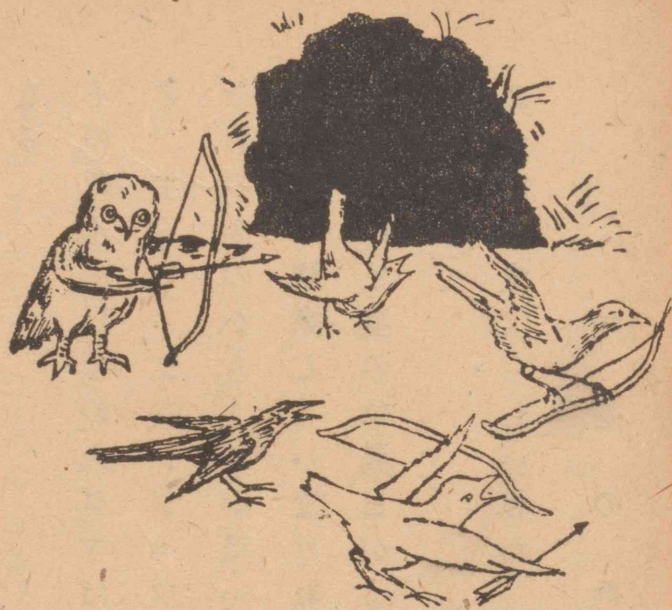


「そう言われれば、見えるような気がするわ。」
「春のくれになると、大グマは長い間、冬ごもりしていたほら」

あなの中で目をさまし、はいだして、食物をさがし始める。それをすばやく見つけるのはシジュウカラだが、ちっぽけな



鳥なので、急いでなかまの鳥たちには知らせる。そこで七わがそろって、コマドリをまっ先にして、大グマを追いかけるというわけだね。シジュウカラは、クマを殺したらすぐ、にる用意になべをかかえて中にはさまっていく。クマはなかなか早い。夏の間は北の空をどンドン走っていく。かりうどたちは、はらが



すいているので、だんだんくたびれてしまう。フクロウははねが重いし、ぶきようなので、おくれてしまい第一にすがたをかくす。続いてカケスもハトも……。「ウシカイ座が西にしずんでしま

うのね。」
「そこで、残った三ばが、なおも大グマを追いかけて、どうとう秋のなかばにクマに追いつく。

クマはほらあなににげこもうとするが、コマドリが、やを放ってそのせなかにとびのり、くちばしでつつく。いよいよ

大グマがたおれると、シジュウカラは、その肉をきざみ、火をたいて用意のなべをかけ、りょうりを始めるといふことになる。

その死んだはずの大グマは春になると、またあなからはい出す。すると、またシジュウカラが見つけて……。

「七わの鳥のかりうどが追いかけ始めるのね。おもしろいわね。」
「星をよく観察していなければ、こんな伝説は生まれてこないね。季節と星の位置とがこの伝説にたくみにおりこまれていくのだらう。」

「まったくすばらしいわね。」

(四) 星の歌

北には北極星、北斗星、

こごえて広野をゆくそりも、

むちふりゃ、きらつく七つ星。

中空高いがペルセウス、

オリオン、アンドロメダ、星の雲、

ねんねのお国のふたえ雲。

南の空にはスバル星、

つうんくるつうんくる、美しい、

まだ目がさめてか、話してか。

(きたはら・はくしゅうによる)

リカから伝わったものだそうですが、これには野球という日本語もできて、今では両方使われています。そして野球をする九人の持場の名もそれぞれ二つのよびかたがありますが、アウトやセーフは英語のままのも、おもしろいと思います。

先生 “山田くん、よく調べて来ましたね。先生もおもしろいことを考えましたよ。きみたちは今、さかんに野球をやって、野球のゆかいさを味わっているだろうが、野球がくる前の日本人は野球のおもしろさを知らなかっただろうね。また、むかしの人は、夏の暑いさ中にアイスクリームというものがたべられようとは思わなかっただろうね。きみたちはこの点では幸福者だよ。

ところで、山田くんの発表や外国からきたことばについて、まだ質問のある人はありますか。”

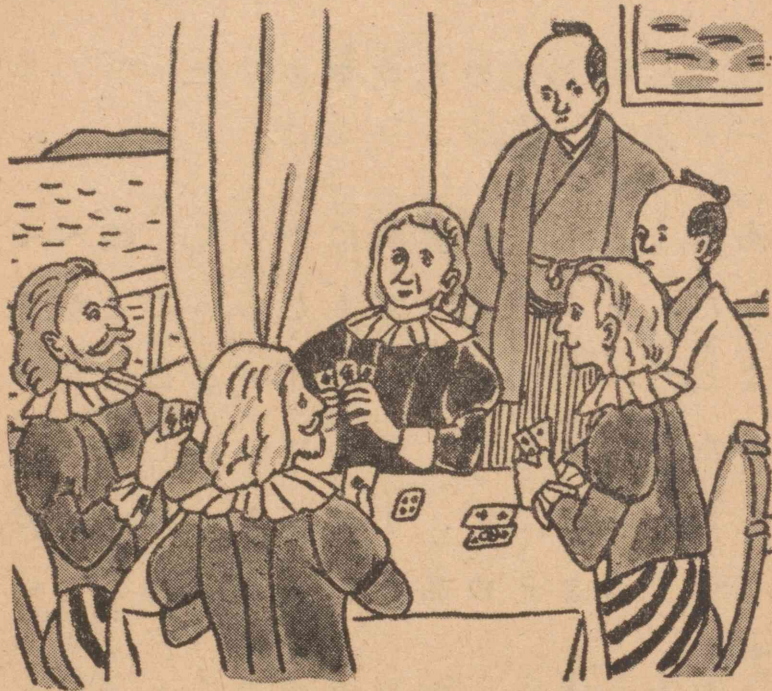
大川 “山田くんの研究は西洋やアメリカばかりでしたが、東洋の国からきたことばもありますか。”

中村 “伝わってきたことばに品物の名が多いのはなぜでしょうか。”

中田 “山田くんが表に書いたことばは、外国語としておくのがよいのですか。それとも、日本語とよんでもよいでしょうか。”

先生 “むずかしい問題が出ましたね。だれかに調べてもらって、また山田くんのように発表してもらいたいですね”

わたしたちも、山田くんの調べたものをもとにしてもっと深く調べてみましょう。



ポルトガル人は、

ボタン カステラ

カルタ タバコ

と、教えてくれています。それを日本人は、
またくり返して、

ボタン カステラ

カルタ タバコ

と、覚えこんだことでしょう。

こうしてポルトガル語が、いつのまにか
日本語の中にはいりこんできてしまったの
だと思われまます。

ほかの外国語についても、同じようです。
つい、最近の例では、ジープがあります。
あの自動車は、日本にはありませんでした。
それが今では、日本中で見られ、おもちゃ
もできていて、小さな子どもまで、“ジープ”
“ジープ”。とよんでいます。ジープは、ア
メリカでつけられた名まえですから、アメ
リカ語が日本語の中へはいっているわけ
です。

しかし、いつも、もとの外国語の名まえ
でよぶとはかぎりません。汽車、汽船、飛
行機のように日本語を新しく作る例もたく
さんあります。

また、ベースボールは明治のころ、アメ

たのだと思います。

先生 “おもしろい研究ですね。みなさんもびっくりしたでしょう。こんなにたくさん外国語がはいつてきているのですから。

山田くんの研究について何か質問はありませんか。”

高木 “バターやパンということばがはいつてくる前には、なんとよんでいたのですか。”

小林 “どうして外国語が、そのまま使われてきたのでしょうか。”

先生 “いいところに気がついたね、それはなぜだろう。山田くん、この問題も調べてごらんなさい。”

山田くんの研究発表 (二)

高木くんたちの質問について、調べてみました。その結果、おもしろいことがわかりました。それは、ことばがことばだけ伝わったのではなく、品物といっしょに伝わったというのです。すなわち、日本には、そういう名まえの品物がなかったらしいのです。

ぼくは、ポルトガル語について、次のようなことを想像してみました。ポルトガルの商船が日本へやってき始めたころのことです。ポルトガル人が、ボタンの付いた洋服を着て、カルタ遊びをし、カステラをたべ、タバコを、すばすば、すっています。それを見た日本人は、物めずらしそうに、ひとつひとつこれは何かと聞いています。

ポルトガル語	カステラ カルタ ジュバン タバコ ボタン パン ラシヤ
スペイン語	シャボン メリヤス メリンス
ドイツ語	オブラート ガーゼ スキー チフス
フランス語	クレヨン シャップ ズボン デッサン マント メートル
オランダ語	アルコール コレラ ガラス コーヒー ゴム ビール ペンキ ランドセル
イタリア語	アルト オペラ ソプラノ
英語	アイスクリーム アイロン スイッチ マッチ ハンドル ラジオ アンパイヤ ナイフ ランプ コップ アンテナ
(参考) 1. 英語は多くて書ききれません。 2. 知らないことばがあったので、それは書きません。 3. 西洋語だけ書きました。	

ぼくは、この表を見て考えました。

- (1)たいへん多いのにおどろきました。ふつうの日本語と思っていたのが、外国

語だというのが多いのです。特にポルトガル語やオランダ語、スペイン語などにそれが多いのです。

- (2)品物の名まえが多数をしめています。
(3)ある国のことばは、学問とか、芸術とかに、一関係のあることばが多いようです。たとえば、ドイツの医学のことば、イタリーの音楽のことばなどです。

いつごろ伝わったものか、はっきりわかりませんでした。けれども、これらの国々の人が日本へ、むかしから、きていたことはわかりました。

ポルトガル、オランダ、スペインの商船は、約四百五十年ほど前に、さかんにやってきたのです。

アメリカ、イギリス、フランスなどは、約百年前から交際が開かれました。この間にしぜんとたくさん外国語がはいつてき

六 わたしたちの研究

—外国からきたことば—

山田くんの研究発表 (一)

このあいだの夕ごはんの時でした。中学校へいっているにいさんが。

“きょう、学校でバターつきのパンという英語を習ったんです。バターやパンは、英語だとばかり思っていたら、パンは英語ではないんですね。ぼく、あとで辞典で調べたら、ポルトガル語だとわかりました。ポルトガル語が日本語にまじっているなんておもしろいな、どうしてだろう。”

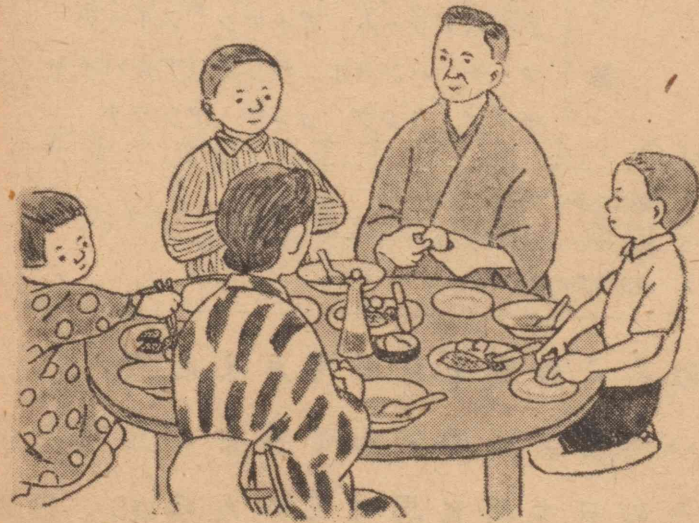
と、言ったのです。ぼくもバターやパンが外国語だと聞いておどろきました。それに、親類みたいなバターとパンが、一方は英語で一方はポルトガル語だと聞いて、なお、

おどろきました。

おとうさんは、ナイフを使いながら言いました。

“パンやバターばかりじゃない。日本語の中には、外国からきたことばがたくさんある。どんなことばが、どこからきたのか。いつごろきたのか調べてみるとおもしろいよ。”

ぼくは、にいさんから辞典やことばの本を借りて、調べてみました。次のような表になりました。



て、伝説のとおりかどうか調べてみましょう。

- 天体に関する伝説は、このほかどんなものがありますか。それらはどうして生まれて来たのでしょうか。
- 伝説のほかに、迷信もありますね。迷信ではどんなものがありますか。
- 天体に関しての科学的な本も読んでみましょう。
- 人間が星や月を利用する場あいを考えてみましょう。

4. 星の歌

- “海と空”全体から、この“星の歌”がここにあるわけを考えてください。
- どんな順序で詩が作られていますか。
- いろいろな星の名が出ていますが、星座表でどこにあるか、また、夜どこにあるか調べてごらんください。
- この詩はただ、星を見ただけの詩でしょうか。それとも、何か、ほかにうたいこまれていますか。

六 わたしたちの研究——外国からきたことば——

- 山田くんは、どんなことからこの研究を思いついたのですか。
- 山田くんの第一回目の発表は、おもにどんなことでしたか。
- 山田くんが気のついたことについては、まだ疑問が残されていますね。
- (1) ふだん使っていて、外来語とは思われないようなのが、ポルトガル語、オランダ語、スペイン語などからきたのが多いのはなぜか。
- (2) 品物の名まえだけが多いのはなぜか。

(3) 学問や芸術上の外来語は、ある国のことばがおもになっているのはなぜか。

というようなことです。

みなさんも、これらについて考えたり、調べたりしてみましょう。

- 第二回目の発表はおもにどんなことについてでしたか。
- あとに出ている大川くん、中村くん、中田くんたちの質問について調べてみましょう。
- 大川くんの質問については、日本と関係の深かった東洋の国々のことを考えてみましょう。
- 中村くんの質問は、山田くんの第二の発表をもとにして考えてみましょう。
- 中田くんの質問の答はなかなかむずかしいのです。日本語か、外国語かの区別をどうしたらよいでしょう。みなさんで話しあってごらんください。
- (1) ボタン・カルタ・ジープ(日本で作られたことばがないもの) ベースボール・テニス・カーテン(日本でも同じ意味のことばが作られているもの)
- (2) 使われる度数によるか。
- (3) わたしたちが、外国語だと思わずに使っているかどうか。
- (4) ことばの意味がすぐわたしたちの頭の中にかんじられるかどうか。

など考えてください。

- (2) まだほかに名しょうのわかる場所があったら、みんなで調べましょう。
- (3) いろいろの大きさや、作り方のちがう本を集めてくらべてごらん下さい。
- (4) このようにこみいったことがらをたくさん書きあらわすには、この文のように、おもなことがらをいくつかに区切って書くとよくわかりますね。

五 海 と 空

はてしないほど広い海と空、その海と空をぶたいにして、どんなことが起こるでしょうか。どんなお話が生まれるでしょうか。“ジョン万じろう”のような実話もあれば、“十五少年”のような小説もあり、また星の伝説なども生まれてきます。

人間は、空も海もじぶんの友だちか家かのようにして、広く遠く想像をめぐらし、また科学的な考えもしています。

1. 波うちあがる

- 海のお話へはいる前のまえがきみたいなものです。
- どんな光景をうたったものですか。
- どんな感じがしますか。力強い調子をよく味わってください。

2. 十五少年

- これは説明にもある通り、ジュール・ベルヌという人の作品で、ほんとうのお話ではありません。しかし、作ったお話だからといって、何にもならないでしょうか。おもしろみが少ないでしょうか。もちろん、“ジョン万じろう”や、“一頭のヤギ”や、“原始林の聖者”のような実話は、わたしたちの心をうつ

ものがありますが、作り話だからといってまったくだめだとは言えないと思います。

それはなぜでしょう。よい作り話の中には真実があるからです。人間の心の真実があるからです。“十五少年”を読んでも、だれの考えはもっともだとか、だれの行いは感心だとか、考えさせられるでしょう。そうして、みなさんが日々をくらしていくたいどや考え方に、何かしらためになるものがふくまれているでしょう。

- “十五少年”では、どんなことがみなさんのたいどや考え方の上に見ならうべき点だと思われませんか。
- これはげん燈です。一々の場面を絵にかくと、すじがはっきりして、いっそうおもしろくなるでしょう。
- 百十六ページにチェイマン島の地図をかいてごらん下さい。そして、川や山や湖や、そのほかの場所など書き入れてみましょう。文がよくわかるようになると思います。
- 物語のすじをひと通りつかんで、お話ができるようにしてみましょう。

3. 大空をあおいで

- 晴れた夜空をあおいでいると、何か深い感じにうたれて、いろいろなことが想像されます。
- この会話文はどんなふうに進んでいきましたか。
- 月と星についての話は、その性質がちがっていますね。どんなふうがちがっていますか。
- 月の世界のことは、どんなことがわかりましたか。
- 星の伝説では、どんなことがおもしろいですか。星座表を見

(3) 小さい時の話、四つからあなたたちはどんなことを考えさせられましたか。

(4) 次のことばが使えますか。

説 明
内 心
無 心
名 声
ほ う 仕
ち ょ く せ つ
永 久

(5) いろいろの人の伝記を読んでごらんください。読んだら、かならず感想を書きとめておいてください。

三 発電所をたずねて

1. 遠足の話しあいをしましょう。

- (1) 去年の遠足の思い出
- (2) 今度の遠足はどこにするか
- (3) 何月何日あたりがよいか
- (4) どんな準備がいりようか
- (5) めいめいの班で研究や調さを始めよう

2. 遠足の地図やプログラムを作る相談をしましょう。

3. どこかで春が、ユリの根、発電所の見学のところの詩をくらべてごらんください。どれもおとなの人の詩です。

4. さしえを見て発電所の構造が説明できますか。

5. トロッコに乗っていく人の目に見え、耳にきこえてくるものは

何でしょう。

音、色、物、それからその人の心の動きなどを考えながら、もう一度読んでごらんください。

6. 次のことばが使えますか。

近 代 的
原 理
人 口
平 行
利 用
修 理
連 ら く
案 外

7. このおじさんたちにお礼の手紙を書いてごらんください。

四 わたしたちの読書

1. 図書係

わたしたちの学級文庫をもっとよくするには、どうしたらよいか話しあいましょう。

2. 読書について

フランクリンが、よい文章をつくるのに苦心したやり方で、わたしたちもいちどやってみましょう。この文を原文としてやってもおもしろいでしょう。

3. 本 の 話

(1) 本についてわかったいろいろの名しょうを、書き出してごらんください。

あべこべに
はたして
光景
むろん
専門
急所

(4) この話を読んでおもしろかったところはどこですか。

二 美しい話

“美しい話”として、“おかあさんの話”“一頭のヤギ”“原始林の聖者”の三つを集めました。どのお話のどこが美しいのかよく考えてごらんさい。

1. おかあさんの話

- これは、よしの・けんざぶろう先生の作品から取りました。
- おかあさんはだれに話しているのでしょうか。それはどうしてわかりますか。
- これは何年ほど前のことでしょうか。それはどうしてわかりますか。
- おばあさんは、おかあさんのことをどう考えているでしょう。
- このお話のおもしろいところはどこですか。
- このお話を読んで、どんなことを感じましたか。
- みなさんも、このおかあさんのような思いをしたことがありますか。乗物の中、道を歩いている時などに。

2. 一頭のヤギ

- これは、ますの・のぶゆき先生の作品から取りました。

○ 目を外国に向けたら、こんなお話も見つかりました。これは、日本にも大へん関係がありますね。

○ このお話の間、日本とアメリカはどんな関係になっていますか。

○ ニコルソンさんの身の上は、戦争前後を通じて、どんなに変わりましたか。

○ また、ニコルソンさんの考えはどう変わったでしょう。変わらなかったでしょう。

○ ララというのは何ですか。どんなことをするのですか。

○ ハリーたちの身の上をはっきりつかみましょう。家はどんなか、家族はどうかなど。

○ ニコルソンさんが、ハリーたちの出したお金を受取っただけとしたら、このお話はどう変わったでしょう。どちらがおもしろいでしょう。

○ ハリーたちのしたことに対して、おかあさんはどう考えているでしょう。

○ みなさんは、ハリーたちのしたことに対して、どうしたらよいと思いますか。

3. 原始林の聖者

- (1) あなたたちはどんな人になってみたいと思いますか。
- (2) シュワイツェルの小さい時の話をみなさんで言ってごらん。

イ. スープの話

ロ. マントの話

ハ. ぼうしの話

ニ. バチンコの話

漢 字 ○は当用漢字です

歴(6) 史(6) 再(6) 班(7) 漢(8) 育(8) 貸(8)
 郎(9) 浅(9) 荒(9) 井(9) 良(9) 直(9) 然(11)
 程(14) 往(14) 飯(16) 種(17) 類(17) 額(18) 浴(21)
 温(22) 内(23) 専(26) 雑(27) 境(28) 荷(30) 最(33)
 付(34) 昭(37) 和(37) 州(37) 営(37) 資(38) 損(38)
 失(38) 民(38) 給(38) 衣(38) 寄(39) 各(39) 情(41)
 貸(43) 伝(44) 族(45) 達(49) 聖(50) 肉(50) 区(51)
 非(53) 緑(54) 成(55) 幸(57) 福(57) 尊(57) 敬(57)
 性(58) 夫(58) 術(59) 菓(59) 初(59) 改(59) 愛(59)
 精(59) 士(59) 画(60) 協(60) 報(60) 礼(60) 構(62)
 質(62) 解(62) 逆(62) 量(63) 管(64) 約(65) 案(65)
 唱(66) 議(68) 粉(68) 建(72) 修(73) 害(74) 努(74)
 湖(75) 像(75) 房(77) 折(77) 午(78) 均(79) 江(80)
 鎖(80) 臣(80) 的(80) 価(81) 値(81) 独(81) 印(83)
 刷(83) 誌(83) 章(83) 序(84) 法(85) 際(86) 布(87)
 版(88) 定(88) 著(88) 納(90) 卷(90) 単(90) 編(94)
 訳(94) 真(94) 災(102) 難(102) 防(110) 鏡(111) 略(116)
 賛(117) 昨(124) 件(124) 倍(126) 斗(126) 座(127) 円(128)
 置(131) 位(132) 極(133) 英 8 辞 8 典 18 特 21
 例 25

学習の手引

一 春

1. どこかで春が
見ないで言えるまで読んでごらん下さい。
2. 学級日記
 - (1) 学級日記をつける相談をしてごらん下さい。
 - (2) 小さいノートに思いついたことを書きとめておくと、学級日記や学級新聞をつくる時に便利です。
 - (3) イ. アイウエオ順になっているものをさがしてごらん下さい。
ロ. イロハ順になっているものがありますか。
ハ. アルファベット順(a, b, c順)になっているものがありますか。
ニ. いろいろな辞典はどんな順にならべられているか調べてごらん下さい。
 - (4) 四月のプログラムをつくってみましょう。
3. カラスとわたし
 - (1) あなたの家では何をかっていますか。あなたは鳥やイヌを育てたことがありますか。
 - (2) あなたたちの小さい鳥やイヌやネコを見ていて気のついたことがあったら、書いておいてください。話しあってみましょう。
 - (3) つぎのことばを使ってごらん下さい。
とんでもない
あきれかえる

再	び	5	牧	師	51							
物	資	38	北	斗	七	星	126					
船	火	事	母	校	57							
船	底	56	北	極	星	133						
フ	ハ	ン	ボ	タ	ン	(20)						
部	分	95	ほ	ど	い	て(く)	17					
ふ	み	し	め	る	29	ホ	ト	ギ	ス	68		
冬	ご	も	り	129	ほ	ね	お	り	112			
フ	ラ	ン	ク	リ	ン	77	ポ	ル	ト	ガ	ル(語)	(18)
フ	ラ	ン	ス(語)	3	ほ	ん	ご	う	28			
ブ	リ	ア	ン	105	本	代	82					
(む	ち)	ふ	り	ゃ(る)	133	本	部	38				
古	雑	誌	83	本	文	86						
プ	レ	ゼ	ン	ト	43	本	屋	88				
文	化	58	マ	ー	ク	88						
文	章	83	ま	え	が	き	94					
ベ	ー	ス	ボ	ー	ル	(25)	ま	か	せ	て(る)	105	
平	均	79	ま	き	も	の	90					
平	行	74	ま	さ	に	75						
平	和	38	ま	す	127							
へ	ビ	62	ま	た	が	り(る)	119					
ペ	ル	セ	ウ	ス	133	ま	ち	が	い	84		
部	屋	73	待	ち	き	れ	な	い	86			
ベ	ン	キ	(20)	マ	ツ	109	ま	っ	さ	き	130	
編	者	94	ま	っ	だ	7						
望	遠	鏡	111	全	く	58						
報	告(文)	60	マ	ッ	チ	(20)						
ほ	う	仕	56	ま	と	ま	り	84				

ま	ば	た	き	125			
ま	ほ	う	16				
ま	水	112					
マ	ラ	リ	ヤ	58			
ま	わ	り	道	28			
ま	ん	ざ	ら	20			
マ	ン	ト	(20)				
み	か	え	し	92			
見	方	99					
み	か	ね	て(る)	35			
み	さ	き	111				
湖	112						
水	ぎ	わ	55				
み	す	て	な	か	っ	た(い)	11
み	す	ば	ら	し	い	41	
導	き	入	れ	る	23		
ミ	ツ	バ	チ	68			
緑	54						
南	半	球	102				
身	な	り	53				
み	む	き(く)	32				
み	ょ	う(に)	35				
虫	72						
無	心	54					
結	び	つ	け	98			
む	ち	133					
む	ろ	ん	15				

明	治	9							
名	声	56							
め	く	つ	て(る)	92					
め	ぐ	ま	れ	な	い(る)	56			
め	ぎ	す	41						
め	ま	い	107						
メ	リ	ー	41						
メ	リ	ヤ	ス	(20)					
メ	リ	ン	ス	(20)					
メ	ロ	ン	37						
も	く	じ	96						
モ	ノ	コ	ー	103					
文	字	60							
も	し	ゃ	114						
も	だ	え	な	が	ら(る)	52			
も	ち	ば	(26)						
求	め	る	104						
も	の	め	ず	ら	し	そ	う	(い)	(23)
も	ま	れ(る)	105						
も	め	ん	29						
森	107								
ら	く	5							
ラ	シ	ャ	(20)						
ラ	ラ	38							
ら	ん	学	者	77					
ラ	ン	ド	セ	ル	(20)				
陸	地	107							
理	く	つ	64						

山	国	69				
山	グ	ミ	69			
や	ま	だ	7			
や	ま	と	よ	し	お	9
山	な	み	74			
タ	ぐ	れ	55			
夕	飯	16				
湯	げ	51				
ゆ	し	ま	28			
ゆ	ず	つ	て(る)	81		
ゆ	っ	た	り	70		
要	点	83				
用	意	23				
よ	く	朝	81			
よ	し	だ	7			
よ	じ	登	る	110		
夜	通	し	83			
よ	び	名	86			
よ	ほ	ど	18			
ら	く	5				
ラ	シ	ャ	(20)			
ラ	ラ	38				
ら	ん	学	者	77		
ラ	ン	ド	セ	ル	(20)	
陸	地	107				
理	く	つ	64			

利	用	60				
両	親	49				
量	63					
両	方	26				
料	理	132				
リ	ン	カ	ー	ン	77	
る	す	104				
歴	史	5				
連	ら	く	73			
ろ	う	そ	く	た	て	114
ロ	ケ	ッ	ト	125		
わ	か	わ	か	し	い	72
わ	け	な	く	123		
わ	な	118				
ワ	ラ	ビ	68			
わ	ん	ば	く	20		

ダチヨウ 118
 たづな 118
 たなびく 111
 谷間 66
 たぬきねいり 24
 楽しく 5
 たまご焼き 19
 たましい 105
 ダム 63
 ためらって(う) 32
 だ輪 106
 単位 90

 ちえ 102
 チェイマン(島) 116
 地球 125
 チフス (20)
 茶飯みちゃわん 19
 中学校 (18)
 調合 59
 ちやくせつ 57
 著者 88
 助手 59
 地理 62
 チリー 122

 つうんくる 133
 つえ 29
 つづって(る) 84
 つのって(る) 105

つまり 79
 つり(道具) 109

 定価 88
 程度 14
 手こずって 53
 鉄管 63
 デッサン (20)
 鉄とう 74
 てっぽう 109
 手分け 62
 天じょう 23
 伝説 127
 伝達式 49

 ドイツ(語) (20)
 説いて(く) 40
 一頭 48
 当日 60
 同情 41
 当然 57
 とうとい 39
 東南 111
 当番 5
 当分 108
 東洋 27
 土管 111
 土読者 97
 独立 82
 土人 56

とたん 30
 取っ組みあい 50
 とにかく 108
 ドノバン 112
 とびら 92
 ともした 59
 努力 74
 とりわけ 38
 (五)ドル 45
 トンネル 66

 内心 53
 直して 9
 なかみ 86
 中村 (27)
 中田 (27)
 流れ星 126
 なげうって 56
 なた 65
 夏みかん 37
 なりたち 95

 肉 50
 ニコルソン 36
 日しゃ病 56
 ニュージー
 ランド(川) 116

 布 87
 ぬま地 111

根 10
 ねがえり 24
 熱 56
 ねんね 133

 のうか 41
 納本 90
 のがれる 122
 のこぎり 65
 のこのこ 18
 乗せる 115
 のび 67
 のむらまさお 9
 飲む(む) 51
 のりづけ 89

 パーセント 79
 ハイジ 79
 はかない 105
 バクスター 109
 ばくふ 80
 はさまって(る) 130
 はじいて(く) 25
 ハシプトガラス 17
 ハシボンガラス 17
 初めて 85
 はしよって(う) 29
 バター (18)
 はたして 22

バチンコ 53
 発案 116
 発見 75
 発行 89
 発電機 64
 発電所 12
 ハト 129
 はなれ島 109
 はね車 64
 ハノーバル 123
 早わざ 27
 ハリー 41
 はりきって(る) 25
 はるばる 48
 張ろう(と) 104
 班 6
 半円形 128
 反対 16
 番茶 19
 ハンドル 19

 ビール (20)
 引きあげた 37
 引受け 117
 飛行機 (25)
 日ごと 105
 久しい 38
 非常に 53
 ビスケット 23
 ひそんで(む) 75

額 18
 左横書き 89
 必死 106
 必要 99
 ひときわ 107
 ひとまず 113
 人まね 27
 日どり 62
 ヒノキ 109
 ひび 74
 ひびかせる 97
 日まし 68
 費用 62
 標語 13
 表さつ 86
 表紙絵 89
 病室 59
 昼間 28

 フェラデー 77
 不安 105
 ぶかっこう 110
 ふくみました 22
 不幸 57
 ぶさほう 18
 無事 114
 不思議 68
 夫人 58
 防ぐ 110
 ふたえ雲 133

かがめて(る).....21
 学 者.....56
 カケス.....129
 果じゆ園.....37
 かじりついて(く).....106
 カステラ.....(20)
 かすめて(る).....55
 風切りばね.....15
 家 族.....45
 かた手.....29
 価 値.....82
 ーがち.....121
 かつあわ.....77
 活 字.....22
 カヌー.....58
 かねて.....14
 かまわず.....16
 からかわれる(う).....54
 カラス.....14
 かりうど.....127
 カリフォルニア州.....37
 カルタ.....(20)
 カレンダー.....12
 かんごふ.....58
 カンムリ座.....128
 かんりんまる.....80
 ー
 気 温.....118
 機 会.....83
 きしんで(む).....29
 ぎ せ い.....74
 逆 流.....62
 急 所.....18
 救命ボート.....106
 教 会.....54
 共 著.....94
 協 力.....60
 きりたつた(つ).....70
 銀 貨.....43
 近 代.....58
 ー
 草むしり.....25
 薬59
 くつがえす.....58
 配って(る).....74
 区 別.....51
 く め ん.....81
 グラビヤ.....95
 クリスマス.....119
 くわえよう(る).....23
 経 営.....37
 芸 術.....(21)
 ゲオルク.....50
 決 し て.....54
 原 始 林.....50
 げんこう.....93
 げん 燈.....102
 原 文.....83
 けんめい.....59
 けんやく.....109
 原 理.....72
 交 際.....(21)
 強 情.....53
 構 造.....62
 交 通.....80
 コーヒー.....(20)
 幸 福.....10
 光 明.....59
 こうもりがさ.....29
 こ 児 院.....49
 湖 水.....75
 コスター.....116
 答104
 こ よ み.....109
 ゴルドン.....103
 コレラ.....20
 コロラド州.....37
 コンクリート.....73
 サービス.....112
 災 難.....102
 さ か さ.....118
 さかまく.....100
 さくいん.....98
 作 者.....93
 さけて(る).....100
 鎖 国.....80
 さ じ.....51

さ し き.....20
 さしわたし.....64
 雜 草.....27
 さびて(る).....114
 サンフランシスコ.....122
 ー
 シー プ.....(25)
 シカドリ.....129
 (ダム)式.....63
 事 件.....124
 実 験.....82
 室 内.....23
 質 問.....62
 辞 典.....(18)
 始 発.....65
 し ば ふ.....22
 し ぶ く.....100
 しめして(す).....98
 シャッポ.....(20)
 シャボン.....(20)
 じゃま者.....119
 ジュウール.....
 ベルヌ.....102
 修 理.....73
 手 術.....59
 し ゆ す.....29
 ジュバン.....(20)
 出ばん(船の).....103
 出 版 者.....92
 順 序.....66
 上 級 生.....118
 しょうこ.....16
 しょうぶ.....39
 上 陸.....104
 序 文.....95
 書 名.....99
 ジョ ン.....41
 知りあい.....14
 しん 察.....59
 信じません(す).....112
 しんじゆ.....13
 人 道.....59
 進 歩 的.....80
 親 類.....(18)
 人 類(愛).....59
 ー
 スー プ.....50
 水 夫.....103
 水 路.....63
 すんだ(む).....38
 ストーブ.....116
 スバル星.....133
 スペイン語.....(20)
 す ま い.....108
 スロー(号).....103
 ー
 セー フ.....(26)
 星 座.....127
 精 神.....59
 成 人.....55
 生 命.....11
 西 洋 語.....(20)
 整 理.....8
 せ き り.....58
 節 約.....92
 せ 表 紙.....87
 せ も じ.....89
 戦 死.....41
 選 者.....94
 ゼンマイ.....68
 専 門.....26
 ー
 想 像.....75
 送 電 線.....73
 そつぎょう.....57
 ソプラノ.....(20)
 損 害.....74
 尊 敬.....57
 損 失.....38
 ー
 太平洋戦争.....37
 たいまつ.....114
 題 目.....84
 大陸(続き).....114
 高 木.....(22)
 た く み.....132
 たくわえ.....117
 たしかめ(に).....112
 助 け 船.....120
 ただし(くん).....12

1971
3月
11日

広島大学図書
蔵書印

0
71

広島大学図書

0130449671



おことわり

本書の用紙は来年度使用教科書からより良質のもの（新教科書用紙）を使用することになつて居ります。